
ここが願いの終着点

水沢 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ここが願いの終着点

【Nコード】

N6804Y

【作者名】

水沢 流

【あらすじ】

「異界に行ったら、理想の自分の姿になるのがセオリーじゃないの!？」

異世界に落ちた途端、なりたかった自分そっくりの「他人」と対面しちゃいました。

自信なし、学力なし、やる気なしの三拍子揃った主人公が「理想の自分」と繰り広げる異世界での物語。

シリアス&コメディごっちゃまぜ、メインはボケツツコミ多めです。

若干、ホラー要素あります（心霊ではなく、エイリアン系）。

死ねばいいのに

ドオン！ と派手な爆炎が上がった。

ブツ飛ばされるクリーチャーの群れ、こつぱみじんに砕け散る窓ガラス。

豪快に爆裂したビルの中から、銀月の夜空へと男のシルエットが跳ね上がる――

「イヤッハア！」

高らかに歓喜の声を上げて、片手にひつつかんだクリーチャーを地面へと叩き付ける男。

ザンツ、と着地したそいつの足元で、砂塵と化したビルの破片が散った。

「ただいま、セーコ」

にイとワイルドな笑みを浮かべた男がアタシに言う。

癖のある黒髪のウルフカットに赤い瞳。引き締まった体。

そいつに向けて、アタシも笑った。

たった一言――そりゃもう、最高の笑顔で、

「死ねばいいのに」

アタシは晴子。ごく普通の学生だ。

いや、学生だった。

それがちよつとした事でこの世界に来て、帰れなくなっちゃったりする。

特別な血筋だとか、世界をどうこうするために呼ばれたとか、別にそんなやつじゃない。

まあ、その話は後にするとして。

ここはゲルナム。アタシの住んでいた世界からすれば立派な異世界だ。

で、ここでアタシのパートナーと言うか、腐れ縁になった野郎が」。

最初に会った時は、どっかの俳優かとマジで思った。

そう言う外見だ。

軽くメタル入った格好も、違和感無くキマってる。

黒いライダースーツに金具を絡め、襟元を大きくはだけさせた独特のスタイル。

アタシ達の世界なら、そう言うのが好きな奴に追いかけられそうな姿だ。

けど、アタシはどうにもコイツと相性が悪い。

「ちよっとは愛想良くしようぜー、レディ」

ずかずかと歩くアタシを、良く通るハスキーボイスが追いかけて来る。

振り返りざまにそのツラを睨んで、アタシは溜息をついた。

「ビルまるごと吹っ飛ばしといて良く言うわ。謝れ。とにかく謝れ」

「それもそうだな」

「わかればよし」

「悪かった」

シユタ、と片手を上げて」が詫びた先は、

「おいコラ待てや」

誰が爆心地に謝れと。

「……もういい、怒る気なくした」

ふう、とため息をついて遠くを眺め、聞こえて来るヘリの音に耳を傾ける。

あー、空が綺麗で目が痛いわ。この痛さは明らかに煙のせいだけだ。

「何でアンタなんかと、なあ……」

男嫌いで近所中に知れ渡ってたアタシが、よりにもよってコイツとだなんて。

別に男にトラウマがあるわけじゃないけど、乙女ちっくな事ばかり望まれててウンザリしたんだよね。うん。

「つれねエなア。あんまり怒ってる的可愛さに欠けンぜ？」

「そりゃあ悪かったっ！」

涼しげな顔でほざくJに、適当な瓦礫をブン投げる。

ぱし、とそれを片手で受け止めたJの、やったら余裕の顔と言ったら！

むかつく。マジむかつく。鼻血ぐらい出せよ、せめて。

フンと鼻を鳴らして背中を向け、アタシはまた歩き出した。

「ほんっと、死ねばいいのに」

——殺しても死なないような奴だけどさ。

彼との縁は、アタシがこの世界に来た日から始まっている。

初めてこの世界に来た頃、アタシは色々な事に腹が立ってて、目の前に現れたクリーチャーに怯えるより前に、こんなふざけた死に方があるのかって頭にきた。

それだ思った。

どーせ死ぬんだ、全部くたばれ！

目の前のクリーチャーも、偉そうに建ってやがるビルも全部、ブツ壊れちまえばいい！

そう思った瞬間、飛び出して来たJがそいつをやったのけた。

ポップコーンみたいにクリーチャーが吹っ飛んだ。

ビルが、サクッとスライスされて崩れ落ちた。

ゲームでそう言う場面を見た事はあるけど、マジで見たのはそれが初めて。

良く出来たセットじゃねーのと思った途端、Jの破壊旋風が終わった。

「。ただの」。

ジャックとかジョーカーとか、みんな好き勝手に呼ぶ。早足で歩くアタシの後ろを、のんびりと着いて来る」。

アタシは先を歩きながら、せめて何かにつまづいてコケればいいのとか、そんな事を考えていた。

そうして壊れた道を迂回すれば、誰もいない公園へと出る。

ほどなくして、風を切るプロペラ音とエンジン音がけたたましく鼓膜を叩いた。

ふと落ちた影の下から、額に手をかざして上空の音源を見上げる

その一機、躯体に吠え猛る龍の模様が刻み込まれたヘリは、アタシ達の雇い主であり家主でもあるアデリアさんのものだ。

「早い迎えだな」

「そりゃあ、アタシが呼んだから——ってちょっと待て！」

制止間に合わず、すいっと持ち上げられるアタシの体。

次の瞬間には、体が浮いた。

いや飛んだ。アタシが飛んだ。

気付けば重力とは逆方向に、ぽーんと花火のように打ち上げられてました。

「ちょ、ジャーッ!？」

みるみる遠ざかる地上で、アタシを跳ばした張本人が笑ってる。

その爽やかスマイルを見下ろして、アタシはスウと息を吸い込んだ。

ここでアタシが唯一使える能力。というか変換機を介して使えるようになった能力。それが、

「ふっざけんなこの……」

いわゆる大声を破壊力にするって奴で、

「クソツタレがーッ!」

叫んだ途端、グワツと辺りの景色が大きく歪む。

直後、ビル1本分の十円ハゲを作られた街に、五百円ハゲぐらいのクレーターが爆誕した。

「大丈夫？ セーコちゃん」

「あ、ありがとうございます……アデリア、さん」

ゼーはーゼーはーゼーはー。

空中に紐なしバンジーされたアタシを拾ってくれたヘリの中で、息も絶え絶えに返事をする。

「……死ぬかと」

生きてますが。

一瞬、マジでお花畑見えたよと胸に手を当ててへたりこむ。

倍速再生されてそんな心音が指に伝わって、どれだけ自分がビビってたかを再認識。

それを落ち着けながら大きく息を吸って、アタシはアデリアさんに提案してみた。

「Jの奴、ここに置いて行きませんか？」

そう言った途端、ドン、と言う重い音と共にヘリが揺れた。Jだ。

「……アンタ、ヘリ必要なくね？」

ひょいと顔を出し、ヘリの上に着地しているJに声をかける。

と、くあ、とのんきにあくびをかましたJが、その表情のままアタシを見た。

「……眠くて」

「落ちてよろしい」

親指を下に向けたアタシに、Jが片手をヒラヒラと降る。

それを見届けて、アタシは窓から頭を引っ込めた。

ふと気付けば、アデリアさんが妙に微笑ましくアタシを眺めている。

それに何となく気まずさを覚えて、アタシは外へと視線をそらした。

アデリアさんは、いわゆるラテン系のおねーさまだ。

淡褐色を帯びた肌に彫りの深い顔立ち、そして豹を思わせるしなやかさを備えた体つき。

目の色は黒く、背中まで伸ばした髪もまた黒い。

見た目に劣らず、戦闘のプロフェッショナルでもあるおねーさま。そんな彼女の顔を映す窓を通して、アタシはぼんやりと空を眺めていた。

ゲシュペンスト

うーん、景色がいいっ！

マンションの最上階、青空間近、見晴らし抜群のスイート・ルームに到着するや否や、やばったい上着を放り投げて窓に駆け寄る。広々とした大きな窓から見る世界は、まるでドラマの一場面のよう。

そんな贅沢感溢れる部屋こそが、アデリアさんとアタシ達の住む場所だ。

…や、持ち主はアデリアさんですけどね。

スニーカーから流れるボサノバも、広々としたリビングも、何もかもがセンス良くまとまっている。

普通、こう言う部屋って成金趣味でケバくなるもんだけど、そうならねえのがアデリアさんらしさなんだろう。

鏡の方を見れば、茶色味を帯びた髪をショートに切り詰め、ジーンズにシャツと言う格好をした平凡な女が映っている。

その、男女と呼ばれても違和感ないぐらいの体格の持ち主こそがアタシだった。

「ねー、アデリアさん」

「何？」

「Jって……つまり、何？」

ひとしきり景色を堪能した後、カウンターに歩み寄って椅子に腰掛けるアタシに、キッチンに立っていたアデリアさんが振り返る。

先進文明——なんて言うともっとメタルちつくなイメージなんだけど、そう言われなければわからないぐらい、ここにはアタシの世界そっくりな日常があった。

良くわからんが、ここはそう言うエリアらしい。まだ他に行った事はないけれど、この世界ことゲルナムには、場所ごとに地方色みたいなものがあるそうだ。

ようするに町の雰囲気を大事にしましょう運動みたいなもので、アタシ達の住んでた町のような雰囲気を作る事が、この場所の売りであり特徴らしい。

「せっかくだし説明するわ。あ、セーコちゃん何か飲む？」

そうたずねてくれるアデリアさんに、こくりと小さくうなずいてみせる。

それから数分もしないうちに、アデリアさんが銀色のケトルの湯をティーポットに注いで、紅茶を一杯淹れてくれた。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

シンプルな白いカップが、渋味の少ない紅茶のはちみつ色を引き立てている。

あ、いい香り。

「普通に湯で淹れるんですね…」

「そうじゃない方法も取れるけど、こっちの方が好きなのよ」

なんか落ち着くでしょ？　と言いながら流れるような動作で椅子に腰掛けたアデリアさんに、カップ片手にうなずいてみせる。

確かに、映画みたいにウィーンって機械でカップが降りてきても雰囲気出ないですもんね。

「セーコちゃん、音叉って知ってる？」

「音叉は……何となく。叩くと音が共鳴するってアレですよ」

いまいち自信ないけど。と、口ごもった最後の方をごまかすために紅茶を一口する。

それはどうやら正解だったみたいで、アデリアさんが笑顔でうなずいた。

「Jはね、ゲシュペンストなのよ」

げしゅ…？

唐突にアデリアさんから告げられた単語に、お勉強ニガテな脳内が一気にオーバーヒートする。

そんなアタシの表情を見てピンと来たのだろっ、アデリアさんが

「種族名みたいなものよ」と解説を入れてくれた。

「セーコちゃんみたいな人がね、時々、こっち側に流れて来るの。そうするとゲシュペンストが対で生まれ、」みたいなのできるってわけ」

そんな風に言うアデリアさんの口調は、ずいぶんと言葉を選んでいような調子だった。きっと、もっと複雑な仕組みがあるのを、アタシに合わせて簡単に言い直してくれてるんだろう。

「で、セーコちゃんと」との関係は、その音叉に近いわ。共鳴者の人が精神活動していないと留まる、共振の石」

「石…ねえ」

そこで雑誌読んでるあれが石コロですかい。

長身の体をソファに横たえて、頬杖付きながら堂々とまあ、余裕なこつて。

「活動してないと停まるわりにゃ、アタシが寝てても動いてますけど。あれ」

「一回共振すれば、当分動けるのよ」

「…はあ」

わかるよーな、わからんよーな。

とりあえずアタシが来たから」が生まれて、アタシが死ぬか何かして精神活動が停止すると、」もいずれ消える。

ともかく、そう言う事らしかった。

と言うか、それぐらいしか理解できませんでした。はい。

「んで、アタシが来て」が生まれたとして」

「ええ」

「最初からあの格好で生まれて来るんですか？」

「違うわ。『原野』『深層』『集合意識』『混沌』『坩堝』…まあ、私達ミーディウムによって呼び名は色々だけど。」はそこから私が拾い出したの」

「……」

「世界が違えば、呼び出したとか召喚したって言うのかしらね。ゲ

シュペンストって最初実体がなくて、波長が合う形にしか固着しないのよ。ゲシュペンストの望む形をどこまで構築できるかが、私達の腕の見せ所ね」

「はあ」

つまり、気に入った器にしか入らない幽霊みたいなモンですね。こう、日本人形の髪質が気に入らないと宿らない呪い子さんとか。なんて贅沢な奴なんだ、と腹が立つてくる。アタシなんて、見た目選んで生まれて来れねえってのに。

「不公平だ」

ばやき、相変わらず悠々と雑誌読んでる」をチラ見して、ふう、と大きく息を吐く。

そんなアタシの小声が聞こえたのか、アデリアさんがエキゾチックに微笑んだ。

「セーコちゃん、なりたかった自分ってある？」

「……ええ、まあ、一応は」
オンナオンナ言われるのが腹立ってたんで、自由奔放に生まれたかった。

それで、できれば女じゃなくて男が良かった。ちっさい背丈が嫌だったから、できれば高めの身長で、運動能力は抜群が良かったよ。」

思わず、視線が」と合う。

いやいやちよつと待て、違う違う。何かが違う。違いませんかアデリアさん。

慌ててぶんぶん頭を振るアタシに、アデリアさんがくすくすと笑う。

「……ヤな予感がした。」

「まあ、あなたのなりたかった自分って事ね。とても簡単に言っと、そういう存在よ」

——はい？

思わずぼかーんとしたアタシの目の前で、にこにこアデリアさ

んが笑ってる。

ああ、何てまぶしい笑顔。

美女の笑顔って、こんなに破壊力のあるものなんだろうか。

その手の趣味はないけど、屈託なく笑うアデリアさんの前では何も言えなくなる。

直後、ぶわっと頭に血がのぼった。マジで。

「……」

思わずまたJを見る。

あれがアタシの理想？　って言うか、アタシの理想ってあんなチヤラ男じゃねえし、だいたい今の言葉ってJに聞こえてんじやねえの。

むしろ最初から知ってたとか——そう考えると、こっちが落ち着かなくなってるんですが。

「……あの」

「なあに？」

ほがらかに聞き返して来るアデリアさんから視線をそらし、思わず下を向く。

それから、アタシは机の下で指を組んで、ぼそぼそと小声でつぶやいた。

「……それ、ずるくないですか」

いやだってホラ、異世界召喚ってのは普通あこがれの自分になれてバンザーイ！とかそう言うのがセオリーつつかなんつつかねえね。

そう思っている間にも恥ずかしさと腹立たしさとで顔面が熱くなつて来て、反射的に椅子から立ち上がる。

「……J、ちよつとベランダに出てくれる？」

「いいけど」

不思議そうな顔でベランダに移動したJに、つかつかと歩みよるアタシ。

そして――

「納得いかんわーっ！」

泣き笑いの激情をありつたけ込めた絶叫の砲撃で、アタシは」を
大空に向けてかっとなげた。

切片

「何か、こうして見ると異世界って感じがしないよな……」

マンションから出て、夕暮れ通りを歩きながら辺りを見渡してふと呟く。

見えるのは普通の公園。普通のブランコ。普通の街路樹。普通の家。

「……………」

このまま真っ直ぐ行ったら、見慣れた通学路に出るんじゃないかとさえ思えて来る。

それぐらい、ありふれた光景がそこにあった。

「実感わかねー」

先日、盛大にビルごと「J」にぶっ飛ばされた辺りが、もう何事も無かったかのように公園と化している。

そこに足を踏み入れ、ベンチに腰掛けてアタシはふらりと空を見上げた。

だんだんと暗くなって行く空もまた、見知った町そっくりだ。それを眺めながら、アタシはココに来た日の事を思い出していた。

最初は、本気で死ぬつもりだった。

別に死にたくなるほど嫌な事があったわけじゃない。

ただ何となく、面白いと思える物が減っていた。

テレビつけられなくつだらな暗いニュースばかりで、天気は例年に無い何とかか何とかで。

その例年っていつよとツツコミ入れたって、どーせリポーターは答えちゃくれない。

不況がどーたらこーたらでお先真っ暗、恋愛記事は男女の妄想の吹き溜まり。

なんたら活動って何それ楽しいの、それでもって親はうるせえし

束縛するしでうんざりだった。

「ねー、セイ」

「…何」

不意に話しかけて来た幼馴染、純子の方へと顔を向ける。

彼女はバリバリのギャルだ。

純子って名前が気に入らないからジュンと呼ばせる。

周りにも、アタシにもだ。

そして、アタシの晴子もセイと呼ぶ。

アタシとは全然見た目も違う、趣味も違う。

なのに、何でかジュンとは付き合いが長くなった。

何でって言われると良くわからんけど。

「三丁目にさあ、怪の落書きってのがあって。それ見ると次の日異世界に行けるんだって」

「ふうん」

「こっちの肉体は死んじやうらしいけどね。ねえセイ、見に行こうよ。見たら最高じゃん？」

「ハア？」

思わず声が裏返った。

何言ってるの、ジュン。

お洒落して、ダチと騒いで。アタシよりずっと充実した人生送ってそうなのに、一体何なの。

やりかけのゲームのコントローラーを放り投げ、顔だけそっちに向けて眉をひそめる。

画面では今まさにイベントがクライマックスに突入する直前だったが、そんな事はどうでもよくなっていた。

「セイ、あのね」

膝の間、綺麗にデコった爪を揃えてジュンが笑う。

フリルスカートの花の中、宝石みたいにキラキラと爪が光ってた。

「何かさあ…飽きちゃったんだ」

「飽きたあ？」

「んー、先が無いって感じ？」

ジューンはあるまり、言葉選びが上手く無い。

「ちー子もサッチもガッコのみんなも嫌いじゃないけどさ。何だろ…付き合い続けて行こうと思ったら、興味無い話題でもとりあえず付き合わないきゃじゃん」

「まーね」

それが嫌だからアタシはネットを居場所にしてる。

めんどくさくなったら逃げられるし、三次元に王子様探すほど、自分をわきまえて無いわけじゃない。

それでも、それなりにネット内で付き合いはあったし、ゲーム仲間で盛り上がりたりで、まあ退屈はしていなかった。

充実してるかって言われると、正直、微妙だったけど。

「ジューンらしくないなあ、どうしたんだよ」

「んー、だってやっぱリカレシ出来たら女の友情よりリカレシじゃん？何っーの…むなしってかさあ」

「…まあね」

ネットに広がるどの記事を見ても、現実には満足している大人なんていない。

大人っていいなー、なんて憧れるお子様時代はとくに終わってる。

判るのは、腐った現実に向かって阿呆みたいな世間体気にして、それでババアになって死ぬだけだ。

大人になったら判るとかほざいてる連中見ると、全っ然判りたくねえと思う。

無料ゲームも世にあふれてるけど、一周しちまえばそれでおしま

い。

「いいよ」

だから、その噂に対してOKしてみた。

良くある話だ。あの世と繋がっている門とか、死んだら実は異世

界に行くとか言う系統。

半分信じて、半分信じちゃいなかった——けど、今本当にここに
いる。

ジュンがどうなったかは知らないけど、少なくともアタシは『異
世界』にいた。

最初は自分を疑った。

実は事故に遭って、アタシはどこかの病院で寝てて。

これは、そんなアタシが見ている夢なんじゃないかって。

でも、疑っても疑っても夢が終わる事はなくて、結局、考えるの
がめんどくさくなった。

いつか醒めるなら、醒めるまで勝手に続けばいい。

……そう思ったら、ちよつとだけ気がラクになった。

「こつちでも、空は同じなんだな……」

背凭れによりかかり、そんな事をばやいてみると、ふと、後ろか
ら影がさす。

くるりと振り返ると、そこに「」がいた。

「よう、セーコ。腰痛か？」

「……殴るよ」

人が感傷に浸ってる時に空気読めよ。

と言うか、それ以前の問題にだな。

「なあ」

「うん？」

「アタシに用事ある時は寄り道しないで真っ直ぐ来いって言ったよ
な」

「ああ」

涼しげな顔でうなずき、背後のしげみを指差す」。

そこに、ぱつかりと切り開かれたしげみがあった。

公園の外からここまで——ただまっすぐ一直線に。

「大型トレーラーかアンタはっ！」

誰が道路からしげみブチ抜いてまっすぐ来いに行った！

ぜえはあと声を荒げ、深々と息を吐く。

「いくら戻るって言っても、アタシ、そのしげみに同情するわ……」
ほんと、ひどい姿になっちゃって。

猫にむしむしされた後のカーペットみたいじゃないの。

「それで何、また仕事？」

「ご名答。どーせヒマだろ、付き合えや」

「……」

「どした？」

「……なあ」

「おう」

「アタシをのんびり寝させろやあ！ このアホンダラっ！」

昨日今日で仕事に駆り出すな、二度寝させろ！

そんな、仕事まみれのサラリーマンみてえな事を叫ぶアタシの声が、むなしく夕暮れに溶けて行った。

出撃

「アタシ、アデリアさんいなかったらお前のお供なんか絶対やんねー」

お仕事、もといクリーチャー狩りの支度を着々と進める二人を見ながら、もそもそとケーキを齧る。

ささくれた気分を落ち着かせてくれるキャラメルケーキがやけに美味かった。

アデリアさん…… お菓子作りの腕まで反則的だわ。

なんて思ってたなら、

「ライサもいっしょに行くー」

ふわっふわの金髪にドレスを着た少女が、ひよっこりと顔を出した。

ライサ。

こう見えても立派な兵器で、廃棄寸前だった所をアデリアさんが拾って来たらしい。

姿はアデリアさんの趣味だと言う。ぱつと見た感じ、お人形さんみたいな姿だ。

白いフリルのついた薄桃色の服は綺麗にギャザーが寄せられ、小柄な体をひときわ愛らしく見せてくれる。

アデリアさん…… 大人びているんだか、乙女ちっくなんだかわからない人だと言う時に思う。

「ライサは留守番でしょ？」

だめよ、とライサをさとすアデリアさんから隠れるようにして、ふわりとライサがアタシの後ろに隠れる。

「やー。せいこといっしょに行きたい」

ちっちゃな手をぎゅっと握って、目をうるませるライサのかわいい事！

思わずきゅんとなって抱きしめかけたアタシの前で、ライサが言

葉を続けた。

「Jもだいすきだもの」

……おい？

何か今、聞き捨てならん事を聞きましたか。

「オーケイ、ライサ。後で俺が遊んでやるよ」

おいおいおいおい。

何でお前がそこで流し目使った、J。

「何だセーコ、嫉妬か？」

っ！

「誰が嫉妬しとるかボケえ！」

そのおめでたい思考回路を今すぐ水で洗いなおして来い！

近場にあった空容器をブン投げて、アタシは息を荒げた。

「この、阿呆。ほんっと、死ねばいいのに」

生身の人間ごときが、殺せる相手じゃないと理解はしてるけど。

いつか泣かせてやると、アタシは内心で拳を握りかためていた。

「用意はいい？ セーコちゃん」

「はい」

高台の上、仁王立ちになったアタシが硬い声で応じる。

仕事で入った先——ゴーグルを通して見る世界は、肉眼で見るそれとは随分と違った。

無機質な荒野に、奇妙な建物がまばらに立つ世界。そこにはひん曲がった植物のようなものや、謎のモノリスのようなものまで見える。

アデリアさんいわくナイダス。つまり、クリーチャーを生み出しているこの場所の本当の姿だそう。

ゴーグルを取れば、沿岸に美しい海を青く寝かせた、真っ白い建物が並ぶ地中海風の情景にも見えるのに。

その素顔がこんな異様なものだと思うと何だか切なくなってくる。ちなみに、敵が来たら真っ先に見つかりそうな場所にアタシが立っているのにはワケがある。

アタシみたいな「来訪者」は彼らから見えにくいらしいのだ。

やがて視界に次々と入り始める光点で、クリーチャーの位置を確認するアタシに声がかかる。

「セーコ」

「何？」

「マガジンの次の発売日、明後日だよな？」

「……」

この、バカ……っ。

「黙って仕事しろやあ、このストコドッコイ！」

怒りの声を爆発させるアタシの耳元、イヤホンからJの余裕の笑い声が聞こえた。

J達の位置と、敵の位置。

アタシにはそれらが光点に見える。

このセンサーを使ってクリアにそれらを判別できるかどうかは本人の素質による——と言うと聞こえがいいけど、メガネの度が合うようなもの、とアデリアさんは言っていました。

……確かにド近眼だけどさ。

こんな場所でもまでメガネと相性いいなんて超泣けるんですけど。

「セーコちゃん、見える？」

ひっそりと落ち込んだアタシの意識を、アデリアさんの声が呼び戻す。

それに応じて、アタシは視界に意識を集中した。

「見えます……一、五、二十、百オーバー……アデリアさん、来ます！ 気をつけて！」

叫ぶアタシの声が終わらない内に、ぶわっ！ と映る光点が一気に倍増した。

その群れが突き進む先にはJ達がいる。

ケタ外れの再生能力を持つているJは別として、アデリアさん達に傷を負わせるワケには行かない。

「ライサも！ 来るよっ！」

叫び、アタシは「視る」事に全てを集中した。

ゲーマー甘くみんなっ！ だてに弾幕シューティングやってねえ！ 乱舞する光点の中、アデリアさんやライサを自機に見立て、衝突を避けるルートを視線だけで辿る。

すぐさまアタシの眼球の動きがデータ化され、アデリアさん達へと飛んだ。

それを頼りに二人が群れる光を潜り抜け、安全なポイントまで抜けたのを確認して叫ぶ。

「アデリアさん！」

「了解！」

「ライサ！」

「はいっ！」

勢いのある返事二つを追うように、消え去り始める光点の群れ。

それは、アデリアさん達が敵の撃墜を開始した事を示すものだった。

ナイダス

「セーコちゃん、後は大丈夫！」

ミラーシェイドから聞こえるアデリアさんの声を拾って、パネルスイッチを切り替える。

途端に視界の端のほうに光点マップが縮んで、すっと鮮やかな景色が目の前に広がった。

アデリアさんの目で物を見て、アデリアさんの動きを感じる疑似体験。

もつともアタシがアデリアさんを動かす事はできないし、本当に重なっているわけじゃない。

アデリアさんの視覚触覚を拾ったナノマシンの信号を、アタシのゴーグルもといミラーシェイドが受信して、脳にそう見せているだけ。

強制的な白昼夢、人工幻覚と呼んだほうが近いんだろう。この場合。

もちろん、画面の前もとい高台の上にはアタシがいる。体だってある。

重なっているのは感覚だけだ。

「……」

間近で見るクリーチャーは、案の定、お世辞にも綺麗とは言えない姿だった。

いわゆるモンスターと呼べる、鳥獣っぽい姿。

時に機械と肉体が混ざったその姿は、人によつては見るだけで卒倒しそうな外見だ。けど、アデリアさんは平然としたもので、その手の映像に慣れたアタシもまた平気だった。

『さあ、いらつしやいな！ 悪戯っ子！』

色気のある声を放ったアデリアさんの視野に、迫り来るクリーチャーが映り込む。

刹那、タン！ とアデリアさんの細い足が地を蹴った。

高々と跳躍したその体を追って、下方からバネ仕掛けのように次々と跳ね上がって来るクリーチャー。

それを見下ろして笑い、両手に持った拳銃を振り上げる――

『おやすみ！』

高らかにそう叫び、下方へと銃口を向ける。

そこから続く連射の雨を浴びて、一瞬でクリーチャーが四散した。ざまあ。

即座に右へと視野を流す。と、勢い良く滑空して突っ込んで来るクリーチャーが見えた。

だけど甘い！ この腕、この指による反応の準備はすでにできている！

『せっかちな？』

甘く囁き、クルリと回した銃の照準を合わせて即座に一撃。

それに撃ち抜かれて軌道を狂わせたクリーチャーを足場に定め、その頭を踏み蹴ってアデリアさんが跳んだ。

直後、ちらりとアタシの体がある方に目配せしたけれど、アデリアさんの視点からアタシは見えない。

だからいったん意識を自分の体に戻して、周囲を確認してからまたアデリアさんと接続した。

（平気、アタシの方に敵は来てません）

『わかったわ』

短い応答。

浮遊感に包まれたアデリアさんの体が、放物線を描くように空中を舞い、軽やかに近くの屋根へと着地する。

何条もの光を纏うアデリアさんのバトルスーツは、こう言う時、四肢の動きをサポートしてくれるスグレモノだ。

アタシは…うん。

一度着てみて、自分とアデリアさんのスタイルの差にショックを受けて以来丁重にお断りしてますが何か。

『だめよ、ボウヤ。あせるなんてみつともないわ!』

楽しげに笑い、突っ込んできたクリーチャーに再度銃弾を浴びせるアデリアさん。

次々とフォーカスをシフトさせては即効で撃ち抜いて行く様子は、重なってるコツチまでスカツとする。

あつは、喧嘩売る相手を考えろってんだ!

『J達は?』

(平気です)

むしろ失敗するって状況が考えられませんかよアデリアさん、ライサはともかくJだけは。

そう思って小さく溜息をつき、アデリアさんから意識を離す。

そして体に戻ってスイッチを切り替え、アタシは二人の確認に回る事にした。

ライサの方は順調だった。

普段の甘々を見てると兵器らしさなんてどこにも無いが、やっぱり場に出ると雰囲気が違う。

ふわ、と柔らかく後ろに下がったライサの前方に展開されるのは、回転を繰り返す巨大な金属のリング。

ガシャガシャツ、と硬質な音を立てて、リングから突き出した銃口が一斉にクリーチャーを照準に捉えた。

『目標、確認しました』

そう表情もなく、無機質な声で言うライサの両目は、彼女が保有するバトルプログラムの起動を示すディープグリーン。

普段の淡桃に近い色と違って、その眼球の表面には幾つもの数字やラインが映っている。

アタシはライサには重なれなかったけど、その変化はミラーシェイドのズーム機能のおかげで良く見えた。

『迎撃します』

スカートを両手で摘み、片足を引いたライサが優雅な礼を見せた瞬間、何本ものレーザーがクリーチャー達へと襲い掛かった。

蜂の巣と呼ぶに相応しいダメージを食らったクリーチャー達が、断末魔の絶叫を上げながら蒸発して行く。

それを冷たいまなざしで見届けたライサが、すつと片手を上に上げる――

直後にリングだったものがザラリと形を変え、彼女の手の上に巨大な砲台を作り上げた。

無骨な直方体のフォルムを持つ砲台の周囲で、輝きつなり出す無数の雷光――

『フェイズ2、カウント・ダウン。5、4、3、2……』

あ、クリーチャー終わったな。見る間でもなくそう思う。

エネルギーの大きさを正確に把握する事はできなくても、そこから生み出される砲撃がどれだけ爆発的な威力を秘めているかは想像に難くない。

『1――』

ライサのカウントがゼロを告げた時――

急いで反らした視野の端に、目もくらむような光が焼きついた。

一方、Jは。

ええまあ、予想はしてましたよ。してましたとも。
でも、

「アイツ、絶対器用な真似とか無理だよなあ」

こめかみを押さえてつぶやくと、自然と苦笑が唇に浮かんた。

なにしろ一面、見事な更地になっていたワケでして。

ええ。来た時は建物があったのに、今はなーんにもなくなってるわけですよ。

せいぜい、瓦礫の砂利が誕生したぐらい。

「ま、見晴らしはいいけどさ」

「Jが手にしてるのは、いわゆるハルバードに似た武器だ。

全長2メートル強、鉄色をした金属製で、長い柄の先に三日月型の斧と槍、小さな鎌と銃口がついている。

斬ってよし殴ってよし刺してよし、さらに撃って良しのスグレモノ。

それを振り回すJの周辺は、身を隠す場所もないほどの平面になっている。

どれだけ彼が暴れまわったか、それだけでも一目瞭然だった。

「…と？」

戦っていると言うより、クリーチャーで遊んでいるようにしか見え無いJの足元辺りに、ゆらりと陽炎じみた揺らぎが生じる。

それを認め、アタシは急いで声を荒げた。

「ライサ！ アデリアさん！ 出ました！」

『近い！？』

「かなり！」

ここです！ と口頭で説明するより早いとばかり、今見たばかりの景色を二人に転送する。

途端に、物凄い反応速度で二人がその場所から離れて行った。

おっし、アタシちゃんとオペレーターやれてるな。

なんて自画自賛しつつ、アタシも少しだけ後ろに下がる。

ずるり…と。

陽炎が見えたその場所から、巨大な何かが這い出ようとしていた。

「マザー…」

母と言う意を持つ、ナイダスの生みの親。

どう言う理由でコレが来るのかは知らないけれど、コレが来たらその土地はもうダメなんだそうだ。

こんなにも文明が発達した場所でも、どうにもならない事ってあるらしい。

そう思つと、ずきん、と胸が痛んだ。

「……」

家からも出ず、ましてや生まれ故郷から離れた事も無かつたアタシには、住み慣れた場所を離れるつて考えるだけで怖い。

けど、そんなアタシの感傷をよそに、Jの方は逆に殺る気がチャージされたみたいだった。

不適に笑いながら、地から這い出して来るマザーを腕組みしながら眺めている。

その目の前でマザーの異様に膨れた腕が現れ、牙だらけの饅頭みたいな顔が現れ、続いて胴体が現れ――

Jを見下ろす巨大な顔の中心にコォ……と光が集まり始めた辺りで、ようやくJが動いた。

武器を構え、一直線に駆け込んで行く。

直後、カツ！とマザーの顔面から光が爆ぜた。

マザーの撃ち出した光条が、地を削り飛ばしながらJ目掛けて突き進む。

その瞬間、不意にJが笑った気がした。

構えていたハルバードを袈裟懸けに振るい、その一閃で光条を裂く。

かと思えば二本に割れた光の合間に体を滑り込ませ、マザーとの距離を一気に詰めた。

『くたばれ！』

吠えたJが武器を腰横に構え、一気に繰り出してマザーの頭部へと先を突き刺す。

そしてその柄を軸にして両脚を振り上げ、曲芸のようにマザーの頭上へと踏み上がった。

「グルアアアッ！」

耳障りな声を上げながら暴れるマザーの頭上で、Jが両手を高々と上げる――

その上に大きく広がった立体魔方陣が、無数の模様を空中に躍ら

せた。

転機

「無事？ セーコちゃん」

「あ、はい。アデリアさん達もご無事で」

倒されたマザーを見ながら、そう応じてミラーシェイドを外す。それから見た世界はやっぱり綺麗な青い海を臨む湾岸の町で、そこらじゅうに散らばるクリーチャーの死体が不似合いなほどに美しかった。

「いや、一部残骸まみれになってますけど。」

「相変わらず良く壊しますねー。」

「その方が目立つからじゃない？ ナイダスを消せるのは」しかないんだし」

しょうがないわよと言うアデリアさんの言葉通り、できてしまったナイダスを塞げるのはゲシュペンストだけだそうだ。

その証拠に、「」が振り下ろした魔方陣が、クリーチャーの死体の上に絡み付いている。

やがて、ズズ…と鈍い音を立てて魔方陣が地にしみ込み、クリーチャーだった肉片の形が変わって行った。

どのみち原型留めていないんで、具体的にどう変わったとも言えなかったけれど。

「せいこ！」

「ライサ」

ふわっと飛び込んで来たライサを受け止め、ぽんぽんと背中をなでてやる。

その、羽のように軽く思える体重は、本当にお人形さんのようだった。

さっきまでの破壊兵器らしさは、もうどこにも残っていない。

桃色の澄んだ瞳が、愛らしい顔に表情を添えているだけだ。

「せいこ、ライサがんばったあ？」

「うんうん、偉いね。ライサ」

と、やわらかな金髪を撫でてあげながら、とにかくライサを褒めまくる。

その手の下で、えへへ、と恥ずかしそうに笑うライサが本当にかわいくて、一人っ子だったアタシはまた、その様子に胸をときめかせた。

うわー、やっぱり可愛いつ！

よし、妹ゲット。

そんな事をしているうちに、いつの間にか帰って来てたんだろう。気付けば、」がアデリアさんと話し込んだ。

「……」

あれ？

「……」

あれ？

珍しく」が真面目な顔してる？

そんな違和感に、ライサを抱えたまま近付いて行くアタシ。それに先に気付いてくれたのは、アデリアさんの方だった。

「何かありました？」

「そうね……」

と、そこまで話しかけたアデリアさんがチラリと」を見る。その秘密めいたやり取りに、ふと、胸の中がもやっとした。

「あ、アタシに言えない事だったら、いいですよ言わなくても！」

ここで「聞かせて下さい！」と言えない自分にウンザリしながらも、あわててアタシは両手を振る。

だってアタシはこの世界にしたら珍入者で、」みたいに生まれながらにしてゲルナームについて知ってるわけでもない。

なのに……深く突っ込んで聞けるワケないじゃない。

そんなこんなで黙ってしまったアタシに、何を思ったか」がフオローを入れてくれた。

「アデリア」

「なに？」

「何か、セーコが腹減らしてるようなんだが
ぷちん。」

「それで落ち込んでるんじゃない！ このバカ！ おバカっ！」
バカバカバカ！と吠えるアタシに、「目を丸くする。

あ、本気でわかってないって顔してやんの。この野郎。

「…ああ、もうっ！」

いかんいかん、これじゃ」のデリカシーがなさすぎる。アタシの理想にこんな欠点はねえぞ。

やはりここは改めてアタシの理想を教え直すべきか！なんて真剣に考えていたら、今度は本当に答えをくれた。

「まあ、メシは後で食いに行くとして。さっきのマザーはF1だ」
…グランプリ？

何のこっちゃと首を傾げるアタシに、アデリアさんが説明をくれる。

「第一世代。つまり別のマザーの子供みたいなものね。本体がまた別にあるって事」

あ、そう言う事ですね。理解理解。

そう納得して」を見上げると「こんな事もわからんのか」みたいな顔してた。

ぬあああ、いちいち腹の立つっ！

「」

「何だ」

「今度、女心に関するマガジンも読んだ方がいいと思うよ」

マジで。そう言いながらライサを降ろし、「」に指をつきつけて顎をしゃくる。

その途端、アデリアさんがふと何かを差し出してきた。

小さなバッジ…みたいな金属塊。

広げられた翼のトライバル模様が彫り込まれたそれは、エンブレムに見えなくもない。

「何ですか、これ？」

「マザーから出て来たの。ミーディウムを養成する学院のものよ。私が卒業した場所なんだけど……」

と、そこまで言って黙ったアデリアさんに、思わずバツジを握り締めて続きを待つ。

そんなアタシに、アデリアさんがクスリと妖艶に笑った。

「セーコちゃん、一つ頼み事して良いかしら？」

「あ、はい」

「私、あの学院で顔が知られちゃってるから、セーコちゃんに行つて欲しいのよね」

「はい」

ただのお使いでしたら喜んで。

「スパイとして行つて欲しいの」

「はい？」

声が裏返った。

ちよ、ちよつと待つて。

ただでさえ友人作るの苦手なアタシに、いわゆる諜報活動をやれと？

スパイってあれでしょ、人から情報聞き出したりする奴でしょ。

ムリムリムリ絶対ムリっ！ と繰り返し、アタシはあわてて身を乗り出した。

「あの、アタシ自信ないです。ここの技術にも不慣れだし、何かあつても切り抜けられる自信ないし。その、ここの常識だつて知らないし勉強もしてないんで――」

「大丈夫よ、ちゃんとフォローはつけるから。ね？」

……。

……。

アタシとアデリアさん、そしてライサの視線が「」に向く。

途端、「」がふつと小さく溜息をついた。

ええ、ばつちり目撃しましたよ。

同時に肩まですくめてくれちゃったのを！

「ちよつと」！ 何その『しょうがねえな』みたいなリアクション」

「そう見えたか？」

「見えたよ！」

「じゃあ、それで正解だ」

こんの天邪鬼……っ。

「アンタがアタシの理想形だなんて、絶対何かの間違いだと思う……」
アタシは認めんぞ、認めるもんか認めませんよ。

なんて内心でギリギリ歯噛みするアタシをよそに、数日後にはちやっかり入学の手続きが済ませられていた。

予習

「ん、よし」

一仕事終わって帰った後、アタシはここに来て初めて料理をした。帰り際に入学話を聞いて仰天したけれど、手続き済んじゃったものは仕方ない。

ちなみに調理はモチロン、アデリアさんに聞きながらだ。

前世で包丁も持たせてくれなかったせいで、手付きは幾分ぎこちなかったけれど、それなりに頑張った…と思う。

「セーコちゃん、終わった？」

「あ、はい」

作ったのは、簡単なスープとミートパイ。

味の調え方を教わりながら、初めて作る料理は思いのほか楽しかった。

アデリアさんとアタシが作った物の差は…まあ、考えないようにしよう。

とりあえず形になったので良しとする。

「J、ライサ？ 出来たわよ」

「ああ」

「はあい」

アデリアさんの呼び声に応じて、それぞれ自分の席に着く面々。アタシの隣にアデリアさん、真向かいにJ、そして斜め向かいにライサ。

そんな圧倒的に女率の高いここで、やっぱりJだけが浮いていた。「これ、料理か？」

席につくや否やアタシの料理を指して尋ねるJ。
失礼な。

反射的にむすくれたアタシの代わり、Jに答えてくれたのはアデリアさん。

「セーコちゃんが頑張ったのよ。本当よ」

ああ、穏やかな声が耳に優しい。

アデリアさんいい人だ、と感激しながら自分の作った方を口に含み――

「……う」

自分で言うのも何だが固まった。

うん、まあ食べられる味だ。

破壊的に不味くはない。

けど、明らかに一味どころか十味ぐらい足りない気がする！

アデリアさんの料理で舌が肥えすぎたのに加え、アタシの料理の下手さが微妙な加減にフュージョンして、何というかとても残念な一口目だった。

「せいこっ」

「……うん？」

「おいしーよ？ これ」

頬張ったパイをむくむく噛み締めながら、そう言ってくれたのはライサ。

ああ、何ていい子！

アタシはアタシの女神だ！と拳を握り締めていたら、隣で同じように料理を口にした」がぼつりと呟いた。

「……旨い」

――はい？

「でしょ？」

「ああ」

「え、……え？」

アデリアさんと」の間でさくさくと取り交わされた会話に、アタシの方が目を丸くする。

何だそれは社交辞令か。

新手の嫌味か。

そう怪訝な目を向けていたら、アデリアさんがそつと耳元で囁い

てくれた。

「大丈夫、」は嘘言ってないわよ」
味音痴!?

さてはアタシの望み方が悪かったのか!と悶々とするアタシの目の前で、皿を空にして行く」。

いや、嬉しいんだけど間違っても味覚音痴レベル上げないでね、と内心本気で心配してしまった。

だってどこか美味しい物食べに行った時、その喜びが伝わらなかつたら嫌じゃない。

「これ、微妙な味ですよね」

「そうね。でも、」はゲシュペンストだから」

その一言で説明を片付けてしまうアデリアさん。

すみません——ワケがわかりません。

食事が終わった後、」はどこかに出かけて行った。

ライサは部屋でビーズ編み。

アデリアさんはリビングでティータイム。

そしてアタシは自室、もといアデリアさんにもらった部屋に入り、ばたん、と後ろ手に扉を閉じた。

まず、覚えた事を整理しておこう。

そう思ったからだ。

「…変なの」

今まで怒鳴りつけて来る奴ばっかで、こんな空間はどこにもなかった。

怒鳴らない奴は遠巻きに、気持ち悪いぐらい優しさを強調して来てた。

あなたのためとか言って、単に自分が上に立ちたいだけじゃない

か。

どうせ大人なんてそんなもんだ、とアタシも斜に構えていた。

「死んでも良かったんだけど…なあ」

何でだろう、今ではそんな気がしない。

これが夢なら醒めて欲しくないし、もうしばらく、この流れに身を任せていてもいい気がする。

なんて、色々とまとまらない頭で考えてみたけれど、はつきりした答えなんて出るわけではない。

だからアタシはベッドに仰向けに寝転がって、枕元の本を手にとった。

——青い背表紙の本。

この世界では青を最下位として、虹の色を辿って赤が一番上のランクになるのと言う。

要するにアタシが手にしているのは、アタシの世界で言えば幼稚園児が手にするようなレベルの本なんだけど、アタシにはそれで充分だった。

「過去より、現在へ…」

ルームライトを背表紙に受ける本を開く。

そして何度も読み返した一節を言葉でなぞり、アタシは最終確認へと入った。

「ゲシュペンスト。ナイダスを消せる者。ファウンテンヘッドが精神活動している時だけ行動できる」

身近なゲシュペンストは「だ。」

実際に仕事でナイダスを消す所は何度も見ているし、これに関しては聞かれても間違えないで済む気がする。

次。

「ファウンテンヘッド。異世界から時折、ゲルナームに訪れる者。ゲシュペンスト発生の引き金」

これがアタシ。

略称でヘッドと呼ばれる事もあるらしいってのは、アデリアさん

から聞いた話だ。

そこまで読んでページをめくる。

「ミーディウム。発生したゲシュペンストを探知し、固定する技術を持つ者」

これがアデリアさん。

そして、これからアタシが行くのが、そのミーディウムを育てる場所って事。

「……」

そこから後ろのページは、世界の状況についてだった。

「ゲルナム。正しく歪んだ世界。崩壊予定、あるいは崩壊した各文明の特徴保存を目的としたコロニーを持つ。生活空間はこのコロニーを利用して行うのが一般的」

……。

これは、アタシのいた文明が将来的に滅びるって事なんだろうか。まあ、滅びかねないぐらい危なっかしい文明だったのは認めますけどね。

とりあえず、ゲルナムにはコロニーがいくつかある事、それらの文明の大半が異世界のものをモデルとしている事。

時々そこにナイダスができ、それができたら逃げなきゃならん事。さらに、それを消せるのがゲシュペンストだけである事。

以上の事と、アタシ「ファウンテンヘッド&J」ゲシュペンストの関係が理解できてれば、世界の認識としては及第点らしい。

「ん、よし」

青い本を床に放り投げ、もそりと寝返りを打って枕に突っ伏す。

これだけ覚えておけば、学校で「昼ってどうして明るいんですか」レベルの阿呆な質問するような真似はしないだろう。

結構バカでもないじゃんアタシと思う反面、まだアタシの中で「行きたく無い病」がぐるぐると渦巻いている。

また冷たい目で見られたら。

また、会話から取り残されたら――

「……やめよ」

ここはアタシのいた世界じゃない、異世界だ。

前の事を考えるのなんてやめようと何度も自分に言い聞かせて、アタシは強引に目を閉じた。

記憶

ゲルナームにきてから、ずっと忘れていられた出来事。

そんなもの、今になって思い出したってしょうがないのに――

「……最低だ」

振り払おうとすればするだけ、当時の光景が蘇る。

あの日、気がついたらクラス中が静まり返ってた。

ボロボロになった教科書が、割れた窓から入り込む風に吹かれてた。

欠けたガラスを照らす光。 転げた椅子。 倒れた机。

空気は冷たく冴えていて、彩度がゼロになったような錯覚すら感じさせる。

そんな広い教室にたった三人、バカみたいに座って向き合ってた。原因は…アタシだった。

「こう言う事は、あまり言いたくないんですが――」

そう切り出す教師の声が耳に障る。

殴られた頬が痛い、口の中も苦い。

アタシ悪くない、なんて言ってもムダなのはわかってる。

いつだって、強いのはレッテルを貼る側だ。

…もういいよ。

アタシが全部悪い、そうすれば綺麗に解決するんだろ。

説明する気だって残らず失せたよ。

そんな無気力なアタシを、何度も何度も会話だけが通り過ぎて行
って――

アタシは、ここにはいられないと思った。

それから学校に行かなくなった。

時々、ジュンだけが遊びに来てくれた。

みんな壊れ物を扱うみたいになタシを扱ったから、ジュンが来る事にも文句は言われなかった。

たまに身内が泣いたり怒ったりしたけれど、その中にアタシの欲しい答えはなくて。

そのまま一ヶ月が過ぎ、半年が過ぎ、一年が過ぎて行つた。

「セイ」

アタシの部屋で、メイク直しながらジュンが口を尖らせる。

「もったいないなあ、セイ。かわいいのに飾らないんだもん」

「いらねーよ、そんな評価……」

ジュンを振り返りもせず、溜息混じりにそう返す。

かわいいとか大きなお世話だよ。

そんな風に答えていたら、ジュンが例の話を持ち出して来て――そして、アタシはゲルナームに来る事になった。

「……」

暗い気分で目を開く。

とつぷりと暮れた窓の外、見えるのは広々とした夜景、と――

……コンコン？

「ひっ……!？」

途端に見えたものに息を飲んで、アタシは思わずベッドから飛び起きた。

「アデリアさああん！」

部屋から廊下に飛び出し、リビングに飛び込んでアデリアさんを呼ぶ。

その声に振り返ってくれたアデリアさんに、アタシは涙目で訴えた。

「……」の奴に、扉から入れて、言って、下さいっ！」

そう。窓の外に見えたのは」だった。

来るなら廊下から来てくれと言いたい。

壁に立つ事もできるJにとっては、階段も壁も似たようなものなんだろうけど、アタシはそんな奇抜なご対面に慣れちゃいないんです。

「うるせえな」

「誰のせいだ！」

と、リビングに入って来たJに開口一番で文句を叫ぶ。

Jの奴、どこかで遊んで来たんだろウ。

彼愛用のハルバード、もとい普段はブレスレットやアンクレットの形でその体を飾っている武器が、妙な感じにすすけていた。

「そこまで驚く事か？」

なんてアタシをあしらいつつ、涼しげな顔でソファに寝転ぶJ。

それを見た次の瞬間には、アタシの片手が近くのクッションを引っ掴んでた。

「フツー驚くわっ！」

無視すんなオイ！とこっちに背中向けてるJの後頭部めがけて全力投球。

途端に振り返りもせず、Jがひょいと上げた片手でクッションを止めた。

かと思えば、手首のスナップだけで投げ返して来る始末。

当然のようにアタシもそれを投げ返す。

こうしてJとの間でさりげなくキャッチボールが成立したが、頭に血が昇ってるアタシはそれどころじゃない。

「だいたい、何の為に玄関があるのっ……！」

「構造上」

「そうじゃねえっ！」

アタシの世界の住民は、窓から様子を見に来たりしません！

その事を、ひたすらJに訴えて、説明して。

やがて色々と疲れたアタシがふて寝するまで、それほど時間は要らなかった。

「あの、バカ」

知らん。もう知らん。

あそこまでデリカシーない奴なんて最低だ。

「アホバカタコ……クソ野郎、っ……」

電気消した部屋で枕に突っ伏し、毛布を被ってうだうだと愚痴る。
だいたい、アタシを知らない人が多すぎるんだ。

いや……知られてないから気楽なのか。

過去なんて切り離せない、でも元凶から離れる事はできる。

こっち来て良かった……かな。

でも、あれはない……よ、ね……

ぼやく端から、次々とバラけて行く現実感。

眠気が、徐々にアタシの思考を麻痺させて行つて――

「……」

ふ……と。

不意に、遠くから誰かの聞こえた気がした。

高低二つ。

男と女。

「あんまり怒らせちゃダメよ」

そんな、たしなめるような女の声。

夢現の境、誰のものかもわからないけれど――

「……本当に嫌われちゃうわよ？」

そう諫める声に、男の声が重なった。

「俺を誰だと思ってるんだ」

不遜にて傲慢、身勝手を地で行くような声音。

ふざけんなよ、と言おうとしたけれども声が出ない。

ああ、そうか。

……眠いんだ、アタシ。

「知ったツラで同情したって落ち込むだけだろ。それなら怒らせた方が、まだ…」

そこから声が遠くなる。

…聞こえる言葉が曖昧になる。

「……、だろ？」

「…呆れるわ、貴方らしくて」

「くく、言ってる」

上等だ、と。

最後に聞こえた男の声は、何かに挑みかかるような実に頼もしい声だった。

転入

…でけえ。

学院ウイグリッド入口——もといアタシを見下ろす門を前に、思わずそんな感想が漏れる。

そこはまさに城門だった。

むしろ、校舎がそのまんま城にしか見えなかった。さすが異世界。重々しい金属製の装飾門の左右に、どっしりと伏せている石の獅子像。

同じく石組みされた壁には鳶が這い、建物の歳月を感じさせてくれる。

安っぽい城のアトラクションなら行った事があるけれど、この建物から感じる威圧感はそのなのとは違う——

まさにバケモノと関わる連中を育てる場所なんだと、はつきりわかる雰囲気だった。

門を潜って大きなエントランスに入れば、その突き当りが理事長室。

教室に行くには、その左右壁際にある階段を上がって二階に行き、通路を歩いて行けばいいんだと、「J」がアデリアさんのメモ片手に説明してくれてた。

…多分。

「大丈夫か？ セーコ」

「ぜ、全然大丈夫だと思う…」

もう、自分でも何言ってるかわかりませんけどね！

あああ帰りたい、と早くも気持ちちが全力で後ろ向き。レベル1で魔王城に辿りついちゃった勇者の気分だ。

「なら、前見て歩こうぜ」

「見てるって！」

ちよっと視線さまよってますけど！

「J、アンタの図太さが恨めしいよ…」

「そりゃ、お前の願望だったからな」

なんてさらっと言ってくれたJに、やっぱり願う方向間違えたと思う。

そんなこんなで場に圧倒され、行き交う生徒の好奇の視線にさらされつつ、アタシは理事長室へと足を踏み入れた。

入ってまず目に付くのが、大きな窓と、それを背にして置かれた机。ダークブラウンの重厚な机は綺麗に磨き抜かれ、そこに置かれた小物すらくつきりと映している。

少し視線をずらせば、窓横に束ねられた赤いカーテンが、天上付近で緩くドレープの弧を描いていた。

それを見上げるアタシの、制服の左胸で光っているのはバッジもといエンブレム。

青——最下級を示す位の色だ。

まあ、当然なんだけど。

「J、コレ何？」

「全体図だろ」

理事長室内、角にちょこんと置かれたオブジェ。

それによれば、この城のような校舎を中心として、四つの棟があるようだった。

1・思い切りメタリックな外見の銀の棟、REGULUS。獅子棟。

主に銃機や機械の研究・製造に関わる場所。

2・金属板と歯車が噛み合った金の棟、VOLUTE。螺旋棟。
俗に言う錬金術に関係する場所。

3・ぱつと見た感じ巨大な樹にも見える自然の棟、SERPENT。竜蛇棟。

アタシの世界で言う所の幻獣とか生物に関わる場所。

4・なぜか半透明で描かれている棟、IRIS。霊素棟。
これだけ、ある者にとってはあり、無い者にとっては無いって言

う妙な説明がついていた。

「三角錐…？」

位置関係としては、本校を中心とした三角形の頂点に獅子・螺旋・竜蛇が置かれ、霊素が本校と重なるように上下に伸びている。

と言うか、うつすらと霞んだ霊素棟は見ようによつては上あるようにも、下にあるようにも見える不思議なものだった。オブジェなのに。

「待たせたね」

「はいっ！」

と聞こえた声に急いで振り返り、慌てて頭を下げる。

そこに、いつの間に来たのか理事長さんがいた。

漆黒のインバネス・コートに黒ズボンと白シャツ。ちょっと髭を生やした栗色目のオッサンだ。

オールバックの白髪がまた、服にやたらと良く似合う。彼が首から下げているのがエンブレムでなく十字架だったら、どこかの神父さんかと思っただろう。姿勢も良いし、細身だし。

——や、アタシの世界の神父さんは、腰に剣と銃なんて装備してませんけど。

「今日、転入手続きをする晴子と言うのは君かね？」

「あ、はい。アタシはアデリアさんの推薦で——」

そう言った瞬間、空気が凍った。

何だ、このピシッと引き締まりました的な雰囲気は。

「…あの」

何か変な事言いましたかアタシ。

と、おそろおそろオッサンもとい理事長さんの顔色を伺うと、急に理事長さんの声が裏返った。

「あ、ああアデリア猊下！？」

…へ？

今何か、すごい敬称を聞きましたが。

「すいません、もう一度」

ワンモアプリーズ？

「カーディナル枢機卿。アデリア猊下のご推薦ですよね！？」

「…あ、はい」

勢い込む理事長さんのテンションに、圧倒されて生返事になるアタシ。

だって何かめっちゃ感動されてるんですけど、どうすりゃいいんでしょうかこの状況。

むしろ理事長さん、顔近い近い。

と、今までの緊張が一気に消し飛んだ分、やたら落ち着いてしまった気分を味わいつつ、アタシはひたすら感動する理事長さんをながめてた。

「セーコ、アデリアから何も聞いてないのか？」

そう怪訝そうに尋ねて来るJをくるりと振り返って、うん、とうなずいてみせる。

「聞いてねえ」

確かに、素性も知らん奴の転入をゴリ押しできちゃうんだから、それなりにコネはあるんだろーなぐらいには思ってたけど。

でも今は、そんな事よりアデリアさんから預かった転入届を渡す方が先だった。

「つまり、転入OKって事ですか？」

「ええ、猊下のご推薦とあれば断る理由もございません！」

なんて、ラブレターもらっちゃった男の子みたいに転入届を読みふける理事長さんに、ほっと内心で息をつく。

とりあえず受理はしてもらえるみたいですね。

うん、良かった良かった。

「時に猊下はお元気でしょうか、私が候補生であった頃はそれはそれは皆のあこがれでして——」

そこから先は、理事長さんのあまりの熱弁ぶりのせいか良く覚えていない。

ただ、アデリアさんがここで物凄い尊敬されてたマドンナ的存在

だった事、ある日突然姿を消した事なんか断片的に判ったのみ。

そんな話よりも、アタシは重大な事を発見してしまった。

なにしろ、理事長さんはどう見てもいい年こいたオッサン。

その理事長さんが「若い頃」に憧れたって事は――

「マジですか」

アデリアさん、あなた一体何歳なんですか。

ツァーラ

理事長室で気が抜けたおかげで、校内を歩くアタシの足取りは軽かった。

エントランスの階段を昇り、扉を消して廊下に入る。
そう、開くんじゃなくて消えるんですよ扉。

——理事長室以外は。
扉にも広げられた両翼を模したエンブレムが扉にあって、開けようと思うと勝手に消える。

最初、知らずに押し開けようとしたアタシはバカだった。
こう、見慣れない物にそっと前足を出しかけた猫みたいな姿勢で固まりましたとも！

…恥ずかしい。

「……わあ」

それでも口を開けば、わあ、だの、おお、だのありふれた反応ばかりがこぼれ出す。

それぐらい、アタシは思い切り異邦人してた。
アタシを置いてさっさと帰ったJへの文句も、この光景の前では消えてしまう。

床に敷かれているのは刺繍入りのラグ。柱は所々に彫刻をほどこされた艶消し仕様。

そして壁際では、生徒が何人も談笑している。

服にある程度バリエーションがあると、これが校風なんだろう。

いわゆる制服を着ている生徒もいれば、私服にエンブレムと言う生徒もいた。

…ほとんどが青だったけど。

「あなた、転入生？」

「は、はいっ！」

ビビった！

反射的に振り返ったアタシの目についた人。

それは、どこか冷たい雰囲気を持つグリーンカラーの女生徒だった。

ロングの黒髪に暗い灰色の瞳、気の強さを感じさせる態度と口調。そして燦然と階級を主張しているエンブレムが目にもまぶしい。

風紀委員とかやってそうなタイプだよなあ、と咄嗟に思う。

視線を反らすべく見る先を下に落とすと、すらりとした脚線美が、制服のプリーツスカートに映えていた。

「この時期に珍しいわね。案内書は読んだ？」

「…いえ、まだ」

」の説明もすっぱぬけるくらい緊張してましたので！と内心で毒づく。

嫌だなあ、来て早々トラブルにならないといいんだけど。

そんな思いをそつと噛み締めて、アタシは彼女と向き合った。

「今日が初日？」

そう遠慮なくたずねて来るグリーンカラーの彼女が、ちらりとアタシのエンブレムを見る。

はい、見ての通り最弱生徒です。

思わず逃げ出したくなる気持ちをぐつと堪えて、無言でこくりとうなずいてみせる。

だいたい、アタシ何かやらかしたっけ、と色々考えてはみるものの、扉の前で片手上げたまま硬直してたり、同じ場所で三回ぐらい道に迷ったり、」への文句を一人で呟いてたりした事しか思い至らない。

うん…怪しまれて当然でした。アタシ何て不審人物。

まずいな、詮索されそうになったら全力で逃げよう。

そう決意を固めていると、彼女が不意に口を開いた。

「案内するわ。後、聞きたい事あったら聞いて頂戴」

「うわー、なんか一方的。」

その態度に内心ムカツキつつも、やっぱり彼女の持つ武器に目が行くアタシ。

「何か？」

「いえ、別に」

撃たれたら痛いよな、やっぱり。

「みたいに穴空いても平気な体だったらなあ、と今更思っても後の祭り。」

「案内…お願いします」

変に恨みを買っても嫌だもの、好きで」に理想持ってたかたわけじゃないし。

そんな言い訳を自分の中で並べながら、アタシは彼女の案内を受ける事にした。

名乗りによると彼女はツアーラ。

カラーはオリーブ。

「グリーンじゃないんですか？」

「オリーブは俗称」

「さいですか。」

「……」

「いかん、気まずい。」

この沈黙が気まずい！

カッカツと高い足音を立てて前を歩くツアーラは、俗に言うお嬢様を連想させる。

だからアタシは、侍女にでもされた気分でその背中を追いかけていた。

「ここの先が更衣室」

「はい」

「ここが食堂」

「はい」

「ここを真つ直ぐ行くと講堂」

「はい」

「何だか、自動応答機と化してませんかアタシ。」

「後、聞きたい事ある？」

「あの」

「ツァーラ、それ新人か？」

質問しかけたアタシの声を遮って、不意に割り込んだ声。

それを聞くや否や、アタシのテンションが下がって行った。

確かに青ですけど、思い切り馬鹿にした口調で言わないで下さいよ。

そう喉から出かかった言葉を飲み込み、声の主をジト目で睨む。

ツァーラとアタシを眺めているのは、やや黄色がかったエンブレムの生徒。

うつすらと緑が残っているところを見ると、多分、ツァーラより少し上なんだろう。

浅く日に焼けたような色の肌と、良く締まった筋肉は格闘に慣れた男特有のものだし、ベリーショートの赤い髪や、金に近い琥珀色の瞳は獣にも似る。

ちなみに、顔立ちは悪くない。

…その分、性格は悪そうだったけど。

「お前、コレにわざわざ案内してやってるの？」

そうニヤニヤ笑いながら言うそいつに、アタシが文句言うより早く、

「はい。それが何か？」

カツ、と足音高く彼に詰め寄ったツァーラが、冷たい一言を叩きつけた。

「用があるから声をかけたんですよね？ご用件は？」

「あ、いや…」

「無いのでしたら退いて下さい。案内の邪魔です」

そうピシヤリと言い放った彼女に、気圧された男子生徒が横にそ
れる。

その氣勢に内心で拍手を送っていると、ツァーラの視線がアタシ
に向いた。

「行くわよ、転入生」

「あの、晴子です」

思わず訂正したアタシに、歩き出そうとしていたツァーラの足が
止まる。

やべ、もしかして怒らせた？

そんな懸念で固まったアタシの耳に、彼女の声突き刺さった。

「晴子」

「はいっ！」

生意気言ってすみませんでした！と謝ろうとしたアタシの視野に
入ったのは、

「ほら、行くわよ」

さらりと黒髪をなびかせて振り返る、ツァーラの控えめな笑顔で
した。

中庭

ツアーラは無愛想でも、悪い人じゃなさそうだった。

常に突き放すような口調で話すわりに、質問にはきちんと答えてくれる。

そんなこんなで、一通りの案内を受けたアタシが連れられて来られたのは中庭。

そう、まさに城の庭園！って感じの広々とした空間がそこにありましたよ。

「うわー」

いいセンスだ、と目を見張る。

整えられた下草の緑と調和する、彫刻つきの三段噴水。

蔓草を絡めたトレリスに寄り添う、すらりとしたスタイルのテーブルセット。

少し視線をずらせば、壁に据え付けられた獅子顔の石像の口から、細い滝が流れている様子までもが見て取れる。

そんな感じで見た目こそ中世しているのに、ちゃっかり自販機があつたりする辺りがこの世界らしい。

最も飾り箱的な見た目のせいで、言われなければ何だか判らなかつたと思うけど。

そこでアタシが一個買い、続けてツアーラも一個買う。

そうして二つ分の精算を済ませ、アタシ達は壁際のベンチに腰掛けた。

「もう質問はない？」

「ええ、まあ」

何となくわかったのだ。

と、ジュースにストローを刺しながら頭を整理する。

まず、靈素棟の名前にもなっているIRIS、つまり空の虹は見る人によって五色に見えたり七色に見えたりする事から、定まらな

いもの、感性^{センス}の代名詞にもなっている。

そして虹の一番上は赤。

これが枢機卿のシンボルカラーであるカー^赤ディナルと言う意味と重なって、高位Ⅱ赤と言う図式になっているんだそうだ。

で、青は見習いもとい候補生。

ちなみに一括りで青と呼ばれる色は、実は紫や藍も含むと言う。
アタシの青は紫寄りだ。

何で青とその他で分けられているのかと聞いたら、緑以上になつてようやく、正式なミーディウムとしてナイダスに関われるからだと教えてくれた。

残りの質問は後で聞くとして。

「やっぱり、青が飛び抜けて下なんですネ」

「そうね、そこから上がるのが一番大変よ」

「…そっすか」

つまり青二才か…。

何だかなあ、とストロー噛みつつ肩を落とす。

そんなアタシ達の頭上から、午後にふさわしい穏やかな木漏れ日が降り注いで来ていた。

ちなみに買ったのはヨーグルト風味のフルーツジュース。

知らない果物名ばかりなのがちょっとブキミ。

「未熟の青、か…」

ツアーラは、細身だけど特に弱さを感じない。

それなりに場数も踏んでるんだろうなと、漠然と思わせるものも持っている。

なだらかなボディラインに、切れ長の涼しげなまなざし。

柔らかさを感じさせる肌色を纏う、器用そうな指先がまた女性的。

「何か？」

「…いえ、別に」

何かこう、差を感じると言うか微妙な気分なんですけどどうしまし
よう。

大して年変わらないって言ってたけど、とてもじゃないけど雰囲気が違う。

そんな一方的な劣等感を感じていると、不意に向こうの方で歓声が上がった。

原因はJだ。

アタシを迎えに来た所を、他の生徒に囲まれたらしい。

「珍しいわね、ゲシュペンストだなんて」

「わかるんですか!？」

「ええ。ミーディアムの憧れだから」

Jの方を見つつ、そう答えるツアーラの声に感動はない。

そのリアクションは、他の生徒の熱い盛り上がり比べて、妙に素っ気無いものだった。

あれ? と思った。

おつかしいなあ、Jだったら、もっとモテてもいいんだけど。

「ツアーラさん」

「ツアーラで」

「ツアーラ、もしかしてゲシュペンスト嫌い？」

最後の一滴を飲み干してそう尋ねたアタシに、ツアーラが静かな笑みを浮かべる――

…ゾツとした。

その笑みに、確かな殺意があつたから。

スクイズ

……。

……。

うふふふふ。

「……セーコ、笑い方が不気味だぞ」

「え、そう？やだなあ、気のせいじゃない？」

ふははははは。

これがニヤけずにいられますか！と悪役笑いをかますアタシの後ろを、Jが首を傾げながら付いてくる。

少し前、無言で去ってしまったツァーラにショックを受けていたら、Jがアタシを誘ったのだ。

校内遊技場——カジノっぽい息抜きの場所に。

賭け事いいの！？と仰天したもんだが、Jいわく理事公認。

そついや、アタシここで政府とかの話聞いた事がないなど、改めて思った。

ドラマらしきものはTVでやってるけど、良く考えたらニュース見てない。

コロニー別に生活してるって事は、いちおう法律ぐらいあるんだろうけど。

「……んー」

「セーコ、勝利の余韻に浸ってるのか？」

「考え事！」

難しい顔で余韻に浸るとか、どんだけ器用な奴に見えてるんだ。

と、相変わらず空気読めないJに苦笑して、アタシは夕暮れ色に染まる校舎を校門に向かった。

アタシがJと参加したのは、生徒達の間で流行っているスクイズと言うボード・ゲーム。

オセロとチェスを足して2で割ったようなゲームで、まずオセロ

のように相手の石を挟んで色をひっくり返し、その色を土地に見立てた上で自分の駒を進めると言うものだった。

その駒も色々だ。

例えば自分の色だけしか進めない兵士。

自分の色・相手の色・自分の色となっている場所しか進めない騎士。

相手の色しか進めない暗殺者。

自分色と自分色の間なら相手色が何個あっても構わない魔術師。

乗っていた色がひっくり返されて変わると、今度は変わった色の方しか進めなくなる道化師。

などなど、駒も名前に恥じない活躍をする。

まあ、何だかんだでボードゲーム系に自信があるアタシは、十人抜きと言う快拳を達成してみせたのですよ。

その連戦ぶりに、時々行われていると言う大会に、いつか出たらと言われるぐらい。

「意外だなあ、Ｊがゲーム弱かったなんて」

「お前が強いからだ」

なんてさらっと負けを認めてくれちゃったＪの言葉に、ますます機嫌を良くするアタシ。

そりゃあダテにネット対戦で上り詰めてませんよ！と胸を張ったあたりでふと気になった。

「Ｊ、今なんて？」

「だから、セーコが強いからだ」

「……」

… ああ、そっか。

そう言う事か。

納得した。

「そっぴや、アタシの願いだもんな。」……」

アタシが、ボードゲーム弱いなんてコンプレックス持った事なかったからか。

だからJ、スクイーズ弱かったんだ。

金がある奴だけが強くなれるゲームと違って、古典的なゲームは運と技術次第でいくらでも強くなれる。

それが面白くて前の世界でハマってたんだけど、そんなどうでもいいスキルを披露できる日が来るなんて思ってもいなかった。

「…はは」

なあんだ。

結構やるじゃん、アタシ。

実際、三人抜きを達成した辺りから、アタシは注目の的だったし。そんな感じでずっとニヤけてる顔が珍しかったんだろう、Jが何度もアタシの表情をチラ見してきてた。

「ねえ、J」

「何だ」

「次のマガジン、アタシが買ってあげようか」

そう笑ったアタシに、Jが少し戸惑った顔をする。

そりゃそうだ。

買ってあげよう、なんて思った自分にアタシも驚いてる。

予期せず訪れちゃった沈黙が気まずくて、何となく早足になるアタシ。

そのまま長く伸びた木々の影を何回か踏み越した辺りで、後ろのJが不意に笑った。

「…近エうちに雪でも降るのか？風邪引きそうだ」

「ミサイル降っても平気じゃん」

天変地異でも死なないクセに。

「そうだな」

「そうだよ」

Jの再生能力は普通じゃない。

以前、倒れたビルの下敷きになった時にはついに死んだかと思っただけ、数分後、メキメキとビルを力ち割って出てきやがった。

アンタは雨後のタケノコかと、あの時はちよつと押し込み直して

みたくなつたもんだ。

「いいから受け取っておきなつて。な？」

もしアタシが望んでいれば、」はここまでボロ負けしなかったはず。

そう思うと黙つてもいらなくて、思わずそんな事を口走つてた。

「一冊でいい？」

「マガジンはな」

聞けば、他にもいるものがあるんだと言う。

それにOKサインの親指を立ててみせて、アタシは小走りに校門から駆け出した。

銃砲店

「欲しいものって言うから、何かと思えば…」

武器だったのか、と今頃になって納得する。

「がアタシを連れて入ったのは、いわゆる武器屋と言うか銃砲店。妙にスマートな武器商人ガンズミスが満面の笑顔でお出迎えしてくれる物騒な店だった。

…どちらのホスト様ですか？

ガンズミスは、そう聞きたくなるぐらい穏やかな印象の人だった。やや紫がかった白銀の髪、甘く穏やかな顔立ちに緑の瞳。

モノトーンのスラックスとカットシャツに、きっちり合わせたベストとネクタイがやたら理知的。

「の見たまんま暴力装置です！みたいな外見と並ぶと、余計にその穏やかさが際立って見える。

そんな人がニコニコ笑いながら武器を薦めている図は、なかなかにシニールだった。

「コレ全部、売り物なんだ…」

壁にずらりと並べられた、ナイフやライフル、それからハンドガン。

さらにショーケースに陳列されている物には爆弾も。

犯罪対策大丈夫？なんてヨソ者のアタシが心配になってしまいうぐらい、右を見ても武器左を見ても武器、とにかく武器が目に入らない場所がないぐらい武器だらけだった。

どこことなく青光りして見える金属質な店内は、置いてある物が物だけに肌寒く感じる。

整然と並ぶ品物の無機質さが、飾り気の無い店内に不気味なほど似合っていた。

「もうちよっと、別のモノ買いに行くと行ってたよ」

「例えば？」

「服とか」

と、ズラリと壁や棚に並んだ武器に一通り視線を流してから」を見る。

「……」

見事に上から下までゴシック系だった。

こんばんわ悪魔です、と言われても違和感ないレベルのモノトーンと銀。

「…ゴメン、買い物続けてて」

聞いたアタシが悪うございました。

普段、アデリアさんやライサが普通に対応しているから慣れてたけど、」のファッションはかなり特殊だ。

そこらの店に売ってるようなデザインでもないし、そもそも体格に合うのが少なそうに思える。

まあ、似合うのは認めよう。スタイル良いし。ワイルドだし。

でもやっぱり派手だし目立つし、何よりナルシストっぽいのが色々と痛い！

やっぱ、こう言うのは映画向きだよなあ…とか言っていたら、くるりと」が振り返った。

そして一言。

「誰の願望だったと思ってるんだ」

「……」

「……」

アタシの願望でしたね。

穴があつたら入らせてくれ。

それでも、ガンスミスと語り合う」はサマになっていた。

弾を込め、スライドを引き、手の上で無骨な金属光沢を弄ぶ。

その一連の動作にアタシの願望も捨てたモンじゃないかと自画自

賛する一方、その立場になるのはアタシだったのになんて悔しさも感じる。

なにせ、こちらなりたくてもなれなかったアタシを目の当たりにしてるわけですよ。

ゲシユペンストと言う事もあるんだろうけど、」はとにかく生徒にモテる。

さらに町を歩けば人が振り返る。

まあ、一部はその格好が気になって振り返ってるんだろう——と、思いたい。

「…何だかなあ」

強さと見た目と、ついでに不老かどうかは知らんが不死属性を備えてりゃ、そりゃ憧れにもなるだろう。

だから日々の八つ当たりの一つや二つ、許して欲しい。

むしろ許せ。

「候補生さん？」

「あ、はい」

黙って座っているアタシが気になったんだろう、ガンスミスがアタシに声をかけてきた。

案の定、ちらりとエンブレムを確認される。

」によると、カラーを感覚的に認識できるのは相当に高い感性センスの持ち主だけで、そうじゃない場合、「何か威圧感」とか「何か空気みたいな存在感」とかしか察せ無いそうだ。

だから、行き交う人々の中に飛びぬけて力のある人がいても、そうそう直ぐには判らない。

高位のミーディウムになると、相当に遠くからでも一発で気付けるらしいけど。

「色々大変だったみたいね。大丈夫？」

「…はい」

同情的なガンスミスの言葉に、素直にうなずいてみせるアタシ。アタシがヘッドだと言う事は黙っているよう、アデリアさんに念

を押されてる。

理由は簡単だ。

ヘッドを人質に、ゲシュペンストを脅迫する奴が出ないようにするため。

ゲシュペンストはナイダスと拮抗できる数少ない力だから、そのヘッドも貴重品扱い。

それならSP付きで保護すりゃいいじゃんと思うし、実際にそうなるヘッドもいるらしいけど、どこに行くにも何をするにも確認責めに遭うのは元世界でウンザリしてたので、アタシはパスさせてもらった。

「ショックは抜けたかい？」

「はい」

アデリアさんの提案で、アタシの肩書きは孤児、しかもナイダスと化したコロニーの出身だと言う事にしてある。

ゲルナームについての知識が乏しいのは、その時のショックで色々忘れてしまったから。

そんなシナリオを用意してくれたアデリアさんにはマジ感謝。

付け焼き刃で住民のフリしたってボロ出るしね。

無知を憚^{はば}らなくていいってのは気楽だ。

「しかし、君も罪作りだねえジャック。こんないたいけな子を浚^はってくるなんて。無事だったかい？候補生さん」

「晴子です」

「晴子さん。大変だろうと思うけど、文句はヘッドに会うまで溜めておいてね」

と、心底悪気の無い微笑を向けられ、アタシは思わず下を向いた。すいません、そのヘッドはアタシなんです。

そうネタバラシできるワケもなく、とりあえず口を噤む。

何だこのブーメラン。

アタシの望みって、こんな恥ずかしいモノだったっけか。

「時にジャック、コルティジャーナ達からお誘いが来ているよ」

「何ですか？それ」

「高級娼婦。僕は断り続けてるんだけどね、ジャックは人気者だから」

……。

「そ、そっちの方面でモテたいと思った事は……っ！」

無くは無いけど、やっぱり望む方向間違えた！

商店街

武器商人の名前はミゲル。

彼もミーディアムで、カラーとしてはサンセットに当たると言う。
そんな彼いわく、「が変態。」

「いわく、ミゲルさんが変態。」

ミゲルさん、女性に好かれそうな雰囲気なのに、武器にしか愛を感じないと言う変な人でした。

その分、腕は確からしいんだけど。

「晴子さん、生身フェチのジャックは変だよな」

「セーコに同意を求めんな」

ええ、求められても困りましたよ。

だいたい生身フェチって何だ、三次元愛が全部変態みたいじゃないか。

「そんなに武器がいいんですか？」

「そりゃあね。ほら、手入れが悪いと女も武器も機嫌を損ねるだろう？ 女は愚痴を引き摺るが、武器は宥めてやれば素直になる。全くもって天地の差だよ。タイマーの鼓動は繊細だし、剛健な中に気紛れさを秘めた銃機なんて、身勝手な乙女よりも我侬で力強い。惚れない理由なんてないじゃないか」

いや…真顔で力説されても困ります。

とりあえず、この話題どこかに放り投げられないかなー、と視線をさまよわせていたアタシを救ったのは、試し撃ちで的の切り絵をしていた」だった。

遊んでないで早く助けに来い。

器用なのは認めるが。

「いい調整だな、ミゲル」

「愛ですから」

……。

「…Ｊ、この人家に連れて来ないでね」

「大丈夫だ、ミゲルがお前に興味持つ事は無エ」

アタシが心配してんのはそっちじゃねエ！ライサだ！

そんなに自意識過剰に見えますかと視線で訴えるアタシを余所に、さつさと会計を済ませる」。

そのスルーっぷりに文句を言おうとしたアタシの目に、ふと、」
が買い上げた小さな銃が映った。

ずんぐりとしたフォルムに小さめの口径。短めの銃身も相まって、玩具のようにも見える銃。

それがコルトポケットと言う名の銃をモデルにした物である事は、随分と後になってから知った。

「そんなの使うの」

「ああ、改造しようかと」

… 本当に玩具扱いか。

まあ、Ｊの楽しみと言えばクリーチャー殴りに行くかどこかに遊びに行くか、ぬくぬくとマガジン読んでるかのどれかだから、多分暇なんだろう。

余裕あるな。

「武器持つてる奴って、他にもいるよね？」

カウンターの奥で何やら最終調整をしているミゲルさんを見つつ、
Ｊへと質問を投げかける。

「Ｊ？」

「ん？ああ。ミーディアムは大抵な」

余所見中だったか。

そんなＪに口を尖らせて、アタシは小さく溜息をついた。

「アタシも一個ぐらい持とうかなあ」

「散々、俺を吹ッ飛ばしといて何言っただ」

シヨットで切り出した金属板、もとい猫のシルエット型のものを、
ぴし、とアタシに突き付ける」。

それをぺいっと手で払って、アタシはふっと息をついた。

「でも」、ダメージ受けてないじゃん」

「少しは受けてる。あの程度じゃ死なんが、ダメージ蓄積すりゃ動けなくもなるさ」

「どれくらい？」

「……」

アンタが悩んでどうする。

「でも、何か持ってないと落ち着かないなあ。街中で急に撃たれるとか嫌だし」

「無い。使えるのはミーディアムや俺達だけだ。他の連中じゃ調整すらできん」

聞けば、売り物の銃は基本的にそのままだと暴発する状態なのだと言う。

それを所持者が術的に書き換えて、ようやくまともに作動する仕組みらしい。

その”書き換え方”は学院でしか学べず、結果として何かあったらミーディアムかその関係者だと判るんだとか。

アタシも書き換えたいなあ、と羨ましがったら」が意地悪く笑った。

「上に行くには、精神力要るぞ」
パスです。

ただでさえ後ろ向きな人生、いまさら前を向く気なんてございません。

そんな調子で買い物を済ませ、ようやく繁華街に繰り出した頃には、街がすっかり夜になっていた。

「うわ」

人、多っ！

商店街のメインストリートに出た途端、真っ先にそう思った。

身動き取れないほど多くはない。けど、そこから輝くイルミネーションライトが目眩しい。

高々とそびえるビル、呼び込みの声で華やぐ店頭。

色とりどりの品を並べたショーケースの中には、それらを引き立てるような装飾が施されている。

ゲルナームの第五街区——アタシやアデリアさんが住んでいる場所をそう呼ぶらしいが——その中でも、ここは中規模にあたる商店街なんだと言う。

一応、自分のいた文明がモデルなのに、まるで別世界を見ている感覚だった。

家から出なくなって長いアタシにとっては、元々別世界だったけど。

「」

「ん？」

「武器が要る世界なのに、みんな結構楽しそうだな」
アタシの印象だと、もっとうとう……陰鬱な、世紀末的な顔して生きている人が多くてもいい気がしたのに。

なのに、みんなわりと普通に日常を楽しんでる。

信号待ちしたり、露店で買い物したり、笑い合ったり——

あ、あそこのクレープ美味しそうとか、甘い匂いに誘われるアタシも危機感皆無だったけど。

「怖くねえのかな」

「戦う相手が相手だからな」

「ナイダス？」

天災と等しく訪れる死の象徴。

その名前を口にする、」が軽くうなずいた。

「勝手に発生する病気相手に、普段から怯えまくって生活してる奴なんていねエだろ」

まあ、確かに……。

明日風邪引いてそれこじらせて死ぬかも！とか、明日寒くなるか

らそれで風邪引いて以下略とか思いながら生活するって想像つかない。

「だ、だけどさ。そう言うレベルの問題じゃないじゃん、地域一個なくなるんだよ?」

「地域一個無くなっても、避難した奴は別の場所で生活するだろ。

だいたい、隣の家の奴が風邪こじらせて死ぬだけで、次は自分かもなんて怯える奴いんのか」

いませんね。

「それなら、根源を探して倒すとか!」

「病の根源ってあるのか?」

…ない、ね。

野生動物から感染する病気なんてのもアタシの世界にはあったけど、だからって、野生動物を全滅させたって解決にはならない。

そうした物が悪魔の仕業だと信じられてた時代なら「魔王倒しに行くぞ!」みたいな運動もあつたかもだけど、いかんせんナンセンスだ。

「いつか罹^{かか}る病。いつか起きる不運。いつか来る天災。それに日々怯えた所で不毛なだけだ」

そう、ポケットに両手突っ込んで言う」の声はさばけてた。

その背中を追うアタシの足が重くなる。止まる。

アーケードを流れる明るいBGMが、こう言う時はそらぞらしく

聞こえる――

「…そうだね」

確かに、アタシは人の病死を時に他人事だと思う。

でも、それとこれとは、何かが違うような気がしてた。

再会

アタシの世界はすごく狭い。

でも、物知り顔で世界を語っている大人だって、きっと全てをわかつちやいないだろう。

確信はないけど、そう思ってた。

…そう、思いたかったのかも知れない。

「」

「ん？」

「」は、どこまでアタシの事知ってるんだ？」

「お前が、俺の元を考え始めた頃からだな」

そうになると、人生リセットしたいと思い始めた辺りか。

「……」

ちらりと」を見上げる。

と、笑顔の」と目が合った。

思わず視線を反らす。

それから戻す。

やっぱり、そこにあるのは」の優しげな笑顔――

「……」

く…黒歴史筒抜け！？

「全部、知って…る？」

「そりゃあな」

…っ！

さらっと言ってんじゃねえ！

「忘れるっ！今すぐ忘れるおおっ！」

「無理だ」

「あっさり言うな！どっかに頭打って来い！」

「再生するから無理だ」

無理でも忘れやがれアホンダラ！

そうまくし立てるアタシに対し、「の反応は超ナチュラル。

だからどうした的なその顔が、余計にアタシの頭に血を昇らせた。ウツフンな場面見られたところの騒ぎじゃねえぞコレ。

覗きだよ、罪だよ、ちよつとアタシ涙出て来たよ。

「そんなに恥ずかしがる事か？」

「ざけんな！アタシだって恥ずかしいもんは恥ずかしいわっ！プライバシー返せ！」

一回その頭の中身洗いなおして来い！と――

ひとしきり喚いた所で、アタシはぐったりと肩を落とした。

「最低」

「そう生まれたんだから文句言ったって」

言います。

実に許せん、と尚も愚痴を並べて息をつく。

「だいたい、生まれつき記憶があるって方が気持ち悪くね？」

「セーコはどうだ？」

何でそこで問い返しますか。

「真正正銘、生まれてから普通に生きて来たんだから、いきなり記憶があつたら違和感あるよ」

「小せえ頃の記憶は？生まれてスグとか」

「……ない」

「怖いかな？」

「別に」

だつて一歳二歳の頃の記憶なんて、思い出そうとしても思い出せやしない。

その頃は幸せだったのかも知れないけれど、そんな宝石を掘り出す気にもなれない。

その事を控えめに告げると、「が小さく声を立てて笑った。

「それと同じだ」

物心ついた時から時間が連続していて、それが自分だと言つ認識があつて、それ以上でもそれ以下でもない。

「さりとてそう切り返す」は、アタシよりずっと大人びて見えた。

「いるか？他の説明」

「いる。けどその前にクレープ買って来る」

ちよつと前まで武装民だらけだと思っていた雑踏も、安心してしまえば普通の人の群れに過ぎない。

だから」を残し、アタシは急ぎ足に、甘い匂いを振りまく魅惑の源へと駆け寄った。

ワゴンの側面が開き、それが屋根になる形式の販売車。

その屋根にかけられたひさしの中に、セール中の丸文字が踊っている。

客と向かい会うようにして設置されたクレープ台の横で、新鮮な色を見せる果物はそのままでも魅力的。

そんな誘惑満載の店に並んだ十人ほどの客の最後尾につき、ポツポツな音楽を聞きながらアタシは財布を取り出した。

アタシの小遣いは、主に」達と一緒にいくナイダス破壊の報酬から出ている。

あれだけの労力をかけるんだから一生遊んで暮らせる程の収入があるのかと思いきや、アデリアさんがほとんどボランティア的にかけて来るので、それほど高額では無いんだそうだ。

もったいない。

「アデリアさんぐらい頑張ってるなら、もっと褒められてもいいと思うんだけどなあ」

目立つのは苦手だと言うアデリアさんの言葉を裏付けるかのよう

に、アデリアさんの存在は近所でもほとんど知られていない。肉屋のおばちゃんとのついで話でも、スーパーの店員さんとの雑談でも、ごく自然な感じで話題から外されているような印象を受ける。

例えるなら、限りなく存在感の淡い一般人。

「何か影が薄いんだよなあ、こつ……」

いるんだけど目立たない、みたいな。

でも良く考えたら、ある意味アタシも学校にとってそんな状態だったと思ひ出す。

いかん、暗くなるから忘れよう。

「何にしようかな」

幸いにして、今のアタシはプチセレブだ。

金持ちだ。

甘味ハシゴだってどんと来い！の勢いで残金を確かめっていると、不意に聞き覚えのある声が耳に届いた。

「晴子？」

「ツアーラ……」

夕方、あんな別れ方をしたせいだろう。

反射的に声が硬くなる。

「ツアーラ、あのさ」

「おごるわ」

へ？

「おごるわよ。何がいい？」

「……はあ」

その時のアタシは、ものすごい間抜け顔だったと思う。

そんなアタシをまじまじと見てから、ふいとツアーラが視線を落とした。

「……悪かったと思ってるの」

「あ、はい」

「敬語抜きでね」

「うん」

ごめん、と謝ってツアーラを見る。

無表情で店のメニューを見上げる彼女の横顔が、その時、思いの他寂しそうに見えた。

「選んで、晴子」

「じゃあ、苺クリーム」

「苺クリーム二つ」

あれ、同じのいいんだ。

そう思いつつ、店員がクレープを焼くのを見ながら並んで待つ。
くるくると平たく伸ばされる生地が何気に楽しい。

買い食いなんて久しぶりだと胸を躍らせていたら、ぽつりとツァーラが小声で囁いた。

「…私も同じよ。孤児なの」

「……」

「少し、話さない？」

「うん……」

そう答えて、ふとJのいた辺りを振り返る。

けれど、店に並ぶ人の列が邪魔で、ここからは姿が見えなかった。

「いいよ、話そう」

いつもアタシを困らせてるJだもの、たまには困らせたって許されるよね。

なんて、少し浮かんだ罪悪感を飲み込んで、アタシはJのいる方とは別方面に歩き出した。

世界説明・移送

後で」に聞こうと思っていた事を、アタシはツアーラから聞く事が出来た。

ナイダスが来た時にどうするのかとか、どうやって逃がすのかとか。

だって街中にバケモノが跳梁跋扈した経験があつて、あんなに平常心とかありえない。

そうアタシが主張すると、ツアーラが悲しそうに笑った。

「本当に、全部忘れてしまったのね」

「ごめん」

「謝る事じゃないわよ、忘れた方が幸せな事もあるわ」

そう話すツアーラの声は、アタシをなぐさめようとする響き。

この調子だと、本気で孤児だと信じられてるんだろっ。

理事長さんも一芝居うつてくれたに違いない。

「ごめん。でも、教えて」

まだ、ツアーラに真実を告げる勇氣はないけれど。

それでも、いつか本当の事を言ってもいいかな…と、この時アタシは思い始めていた。

「ナイダスはね、普通の人とは無縁なのよ」

「え？」

「…そうね、どう説明したらいいかしら」

——ツアーラの説明をまとめると、次のようになる。

そもそも、ナイダスにミーディウム以外が入る事自体が自殺行為毒の中に、無防備なまま残るのと等しい愚行にしかないらしい。

万が一無抵抗のままナイダスに触れてしまった者は、それに影響

されて——感染して——しまう。

だから、決してナイダスに関わらせる事なく、逃がさなければならぬそうだ。

肉体ではなく、アストラル体と言うものを。

そんなわけで住民が同じ環境で生活できるよう、サブユニットと呼ばれるコピーコロニーが大量にあつて、ナイダスが出来た場合は揃つてそつちに移動させるのが通例なんだと言う。

住民に特定のエネルギー波を当て、サブユニットに向けて住民のアストラル体を「弾き出す」。

この時、ナイダスの影響を強く受けている個体だと弾かれたアストラル体がやや低い角度で飛ぶので、全反射を起こしてサブユニットに入り込めず、元のコロニーに残されるんだそうだ。

で、無事に跳んだアストラル体は、サブユニットで同じ場所にセツトされた肉体の中身に収まるんだとか。

うん。

「ゴメン、全然わかんなかった」

「感染してると重いから目的地まで跳ばない、とでも例えれば良いかしら？」

「あ、それなら何となくわかるな」

本来の意味とは少し違うんだろうけど、イメージとして納得はできる。

「教え方上手だなあ、ツアーラ」

「……そう言われたの、初めてよ」

照れと言うか困惑と言うか、そんな顔でアタシを見るツアーラ。

その反応に、実は案外素直だったりする？と内心ニヤニヤしつつ、アタシはもう一つ質問を重ねた。

「飛ばされる時に違和感はあるの？」

「あんまり無いわ。例えば私達が電波の中においても、電波が前から来るとか後ろから来てるなんて判らないでしょう？」

「うん」

「それと同じね」

「ふうん」

痛みなし違和感なし労力なし、と三拍子か。

何てラクな移動方法なんだと、思わず感心してしまった。

「いや、やる方はラクじゃないみたいだけど。」

ともあれ、その手順を踏まなかった者はナイダスに残され、移送された人々の記憶からも失せてしまう、と。

そこまで説明をもらって、アタシはちらりと時計に目を向けた。

黒い時計の長針が、真っ直ぐ下を向いている。

「の奴…困ってるかな。」

ふと、そんな事が心配になったけど、アタシは探究心でそれを抑えつけた。

「ミスとかないの？」

「全くないわけじゃないわ、常に多少のエラーは出る。記憶の齟齬そごが良い例ね」

「例えば？」

「誰かの記憶を間違って預かってしまったり、覚えているべき物事を忘れたりするのよ」

人工ド忘れ現象か。

「いずれ、手順を踏まずとも移送が可能な所まで発達したら、単なる偶然として片付けられてしまうのでしょうか。今はまだ、それに対する苦情も多いわ」

要するに、明日どこに行かなきゃいけなかったのに、忘れちゃった責任を負え等々。

命に比べれば安いもんだとアタシは思うが、そう笑い飛ばせない職種の方々もいるらしい。

「ナイダスに影響された人が、ミスって移送されちゃう事は？」

「少しあるわよ」

「マジで!？」

「ふふ、大丈夫よ」

慌てて公園を見渡したアタシの様子がおかしかったんだろう。

ツァーラが珍しく、声を立てて笑った。

「少しだけよ。それを探し出し、捕獲・始末するのもミーディアムの仕事。大丈夫よ、そのまま放置するなんて事はないわ」

残党狩りに関しては、特に力を入れている部分なんだとか。

なにしろ残党は感染者を増やしかねないし、時に人を襲うから。

そんな感じで行われる移送のデータが、保管される場所が界律倉庫。

学院の棟の一つ、IRISの最深部にあるデータベースなんだそう
うだ。

「そう聞くと、学院が政府みたいだな」

「政府？」

「地域を纏めて動かす組織みたいなもの」

「それは、私達の機関ぐらいね。私が知る限り」

あ、やつぱり。

ともあれ、ゲルナームで人が生まれた場合、ある程度の年齢でミーディアムを目指す人と目指さない人に二分される。

目指す人は将来の職に困らない代わり、時に危険と隣り合わせ。

目指さない人は将来の職探しに苦労する事はあっても、ナイダスの被害に遭う事は少ない……らしい。

「あのさ」

「ん？」

「ツァーラも、こう……術みたいなのって出来るの？」

「少しはね」

ゲシュペンストほどケタ違いの力は行使できずとも、小規模のものなら出来ると言う。

力のランクから言うと、カーディナルとゲシュペンストが最高峰、
そこから大きく差が開いて下位にミーディアム、さらにその下にノ
持
ーカラーがあるんだそうだ。

ミーディアムで高位になると畏敬を込めて魔術師・魔女と呼ばれ

るようになり、そうなると一緒にの神格扱いなんだとか。

「アタシ、神様と同居しちゃってるのか。」

「アタシも、オリーブになったら何か出来るかなあ」

ぼつりとそう言っていると、ツァーラが首を横に降った。

「晴子は、候補生でいた方がいいと思う」

「何で？」

「嫌な事、思い出したくないでしょ？」

「うん、まあ……」

でもアタシの孤児話は、一から十まで偽りだよ。

そう言えもしないのに、騙している罪悪感がまた、少し胸を疼かせた。

「でも……ずっと荷物になってるのも嫌なんだ」

「その優しさが、命取りになるわ」

違う、アタシは優しくなんてない。

と、喉から出かけた言葉を飲み込んで下を向く。

「ツァーラ、何でゲシュペンスト嫌いな？」

「私が、孤児になった原因だから」

「……ナイダス、か。」

逃げそびれたのかな、と思っていると、ツァーラが静かに目を伏せた。

「私の両親ね、黒猫シュバルツェ・カツだったのよ」

世界説明・機関と黒猫

黒猫
シュバルツエ・カツと言うのはこのゲルナームにある勢力の一つ。

簡単に言々と宗教だ。

移送先が瓜二つの世界であっても、そこは思いの沁みた土地ではないと言う教義。

そんなの当たり前じゃんと思うが、これがなかなか厄介で、彼らはナイダスが出来そうな時でも動こうとしないそうだ。

それでもって教義はシンプル、祈れば救世主が助けに来ると言うもの。

基本的に移送がほぼ無意識のうちに行われるせいで、実はナイダスなんて存在しないんじゃないかと思う住民も結構な数いるワケで、そう言う連中に声をかけ、機関の言葉は偽りだ、と吹き込んで信者を増やしているらしい。

自分達が労働で作り上げた金銭が移送のエネルギー産生に使われていると何度言っても、横流しだの何だのと難癖つけて終わるんだと言う。

「潰さないの、その宗教」

「潰せないわ。祈りの幾つかは、救済願望から生まれるものだから」
例えば世を嘆き、不遇を呪い、それが巨悪の仕業であると思う事で自分自身を正当化する。

救世主を待ち望む系統は大概にしてそれだとツアー^{ゲヘナ}ラが笑った。

弾圧すればするだけ燃え上がる、決して消えない煉獄^{ゲヘナ}の火だと。

「不毛だなあ。機関以外を信じるな！って教育すりゃいいのに」

「それも出来ないわ。」

決められた事をして、決められた考えしか持たないようにされた人は新しい事を考えられない。

それじゃ、感性^{センス}を磨けないから、ミーディアムの候補生が減って

しまう」

…駄目か。

「でもさ、機関に従わないと残らず感染するんだろ？」

「ええ、基本的にはね」

「基本的？」

「ナイダスが来た時、必ず一つか二つ盲点ブラインドスポットが出来るの。

そこにいる者は感染しないか、しても軽微。クリーチャーとも関係しない。

私がその一人だし…覚えていないと思うけど、晴子。貴女も」

「うん」

「私達が移送しなくても、一定数はブラインドスポットに入るから無事で済むのよ。」

ただ、最近は信者がブラインドスポットに入る確率が上がる不自然さが目立ち始めててね。

スポットを検知できるのは本来機関だけだから、内通者が卒業生の可能性もあるって噂になってるわ」

「…ああ」

つまり、元締めを捕まえる為に泳がせてる部分もあるのか。

ツァーラいわく、厄介な事にシユバルツェ・カツツには長い間「教祖」がいなかったそうだ。

あくまで、同じ宗教を信じていると言う同族意識で集まっているだけなので、黒幕がどこにいるかを察する事も出来ない。

機関を「偽りの危機を提唱する組織」と位置づけ、それと戦う姿勢を見せる事で団結する。

そのスタイルを、随分と長いあいだ取り続けているのだと言う。

「成り上がりの神を気取る愚者が出てくれた方がいいのよ。そうすれば捉えられるから」

「…それって、大先輩から犯罪者が出るって事だよね？」

「そうよ」

「何か嫌じゃない？」

「別に。私達はミーディアムである以前に、一人の人間だから」

どんな良い学校を出ていても、知識があっても、人間特有の間違いは犯す。優劣はない。

そんな事ないと思う油断こそが見落しに繋がると言う事を、決して忘れてはいけないそうだ。

「十のうち一が救われ、九が消滅すれば、生き残った一が残りの九の代弁者になる。」

戦場の爆撃の中で一人生き残った人の取った対策が、実際には全くの無意味であつても、最良の策であるように伝えられるのが良い例ね。

シュバルツェ・カツ十人のうち一人でも生き残れば、その一人にとつて自分の生存が信仰の裏づけになるのよ。

残り九の記憶は誰にもないのだから、その言葉を疑う人もいない」

「…そつか」

そう考えると、ミーディアムって、実は滅茶苦茶不遇なんじゃないかろうか。

何か報われないなあ、とぼやくと、ツァーラが小さく笑った。

「そうね。それでも私の両親は愚かだった。その両親を止められなかった私も愚か。もう、あの悪夢を繰り返したくないから、ひっぱたいてでも泣かせてでも移動させるわ」

毅然きぜんと言う彼女の言葉に迷いは無い。

そう決心するまでに色々あつたんだろうなあ、と思うと、アタシは何にも言えなかった。

いや、レッテル貼る馬鹿なんて滅ぼしておけば！と喉まで言葉が出掛かってましたけど。

「ゲシュペンストとの関係は？」

「ゲシュペンストが現れるのは、ナイダスが増えた時。だから教義だと救世主扱いなの」

「じゃあ、助けに…」

来てたら孤児になつてないよね。

「…ごめん」

「いいのよ。私が許せないのはゲシユペンストだけだから。酷い話じゃない？犠牲が出るまで高みの見物を決め込んでおいて、いざ犠牲が増えて来ると英雄面して現れるのよ。そんな事があっても、それまでに犠牲になった人は救われない。私にしてみれば、ただの疫病神だわ」

…判らんでもない。

もしもアタシが今より10年ぐらい早く来る方法を知っていたら、ツアーラは孤児にならなくて済んだのかも知れない。

そんなの考えても仕方ないし、そこまで家族を思えるツアーラが正直羨ましいと思わなくてもいいけど、アタシの中には申し訳なさが残ってしまった。

「私以外のミーディウムはゲシユペンストが現れるといよいよ大戦だと、自分達の出番が来たと色めき立つけど、私は…」

うわああ、駄目だ。

アタシこう言う話ダメだ、アタシまで暗くなる！

よしここは、ヘッドとしてアタシがツアーラに謝ろう！

「あの、ツアーラ。あたし、アイツのヘッド知ってるから伝言あったら…するよ」

謝るよ、うん。

…怖いから遠まわしに。

「…伝えてくれるの？」

「うん。任せて」

「じゃあ、一言だけ」

「うん」

「殺しに行くって」

やっぱり正体バラせねえ！

発生

…殺人予告、もらってしまった。

目の前のクラスメイトから。

こう言う場合はどう反応すりゃいいんだ、と固まるアタシにツア
ーラが小首を傾げる。

「どうしたの？」

「いや、うん。…頑張つて」

諦めてくれれば一番いいけどねっ！

本当に、こうしていると普通の女の子なのに、殺すとかちよつと
カンベンして欲しい。

アタシは害虫の親玉か。

そんなアタシの心なんて全く知らず、見守るような視線をくれる
ツアーラ。

ここがゲルナームでなかったら、何も気にせず友達やってけたん
じゃないか…なんて、考えても仕方ない事をつい考えてしまった。

「…ナイダスなんて、なきやいいのにな」

「そうね。…ご馳走様」

ツアーラがクレープを食べ終えたタイミングで席を立つ。

案の定、時計を見ると結構な時間が経っていた。

「ツアーラ、帰りは？」

「大丈夫、迎えが来るわ。晴子は？」

「アタシも迎えが来るけど。…あれ？」

語尾が上がる。

改めて時計の方を見て、アタシは首を傾げた。

——変だな。

時計近くの街灯の光、あんなブキミな色だったっけか。

「晴子？」

「あ、うん。ごめん、何かそこの光の色が違ったようが気がして…」

そう言つて視線を戻しても、そこにあるのは元通りの光景。

見間違ひかな、と首を傾げていると、何やら小声で術を紡いだツアールが息を飲んで立ち上がった。

「…ナイダス」

「え？」

「ナイダスだわ。晴子、行くわよ！」

「え、え？」

どこに？と聞く暇も無く駆け出したツアールを追つて公園を飛び出す。

その頃には景色の中に、ぽつぽつと陽炎のような揺らぎが見え初めていた。

それはナイダス特有のもの。

アデリアさんに作つてもらつたコンタクトの助けを借りて言うのもあるけれど、候補生であるアタシにも「来る」と言つのがハッキリわかる兆候だった。

空が良く見える辺りまで駆けたツアールが、小声で何かを唱える。直後、ふ、と空間の一部が揺らぎ、そこから通信機が転げ出した。その小さな六角形、平板状の通信機を掴んでツアールが叫ぶ。

「こちらツアール。街区119・218にてエピソードミック！」

通信機の表面に浮かぶ『応答』の文。

それを確認してすぐに、再びツアールが叫んだ。

「エピソードミックじゃないわ。予測ポイント、タイミングと違う！」

そう言つた直後、街中にサイレンが響き渡る。

危険を告げるその音色に、ざわつく人々が空を見上げ――

…思つたより冷静に、内容に耳を傾け始めた。

『機関より連絡。移送を開始します。住民の方は速やかに所定の位置まで移動、移動が不可能な方は通信にて現在地をお知らせ下さい』
……。

緊迫感皆無。

当然のように「また？」とか「めんどくさいなあ」なんて言いな

がら移動する住民がいて、通信機のようなもので現在地を知らせているのもいる。

何だこの温度差。

今すぐにでも、あのバケモノの群れが押し寄せて来るつてのに。

「ツアーラ、ちょっとみんな無関心過ぎじゃない？」

「見たこともない物を怖がるのは難しいわ。それが怖い物であると伝える手段がないなら、尚更ね」

「…それもそうか」

いつそ面倒臭がつてる連中全部、苦労を疑似体験でもすりゃいいんじゃないのか。

ぼそつとそんな事を呟いたら、ツアーラが呆れたように息をついた。

「誰かに文句言っている人が、相手の状況を理解するために同じ立場に立とうとする？」

しないね。

「同じ立場じゃないと見えない事もあるわ。けれども大体の人が、自分の立場からしか物を見ない。そう言うものだから、仕方ないのよ」

「何だかなあ」

命かけて、助けて、それなのに何もしてないって言われるなんて不遇のゲームヒロインより報われないよ、と言うと、ツアーラがうつすらと笑った。

「機関の狗に、立派な冠なんて不似合いよ」

それでも、ミーディアム同士の中では優劣や戦績で英雄扱いになる人も出るらしい。

そりゃあそうだろう、と言うかそうじゃなきゃ頑張り損だとアタシは思った。

努力を理解してくれる仲間って大事だよな。

「ツアーラ、これからどうするの？」

「私はここに残るわ。そろそろ私の迎えが来る予定だったから、晴

子はそれで学院へ。多分、保護者の所に帰るより安全だから」

そっぴや、アタシ一般人に保護されてる事になってんだっけ。

保護者最強だから大丈夫、とつい言い掛けた言葉を飲み込んで、アタシはふと差し込んだ光の方に目をやった。

滑るように路地に入って来たのは高級車。それも大振りなルーフウィンドウのついた、流線のフォルムが綺麗な黒い車だった。

顔が映りそうなほど磨かれたボディなんて、さわるのすら気が引ける。

…これ、ヤバイ人の車なんじゃないだろうか。

と、恐々と車の様子をうかがっていると、ドアが開いて年配の男が姿を現した。

一目でわかる執事風貌。

それが格好だけじゃない事は、彼が持つ上品な雰囲気から知れた。

…本物だ。

「お嬢様、お迎えに上がりました」

「ご苦労様、セバスチャン」

へ？

「晴子を、私の友達を学院に。思ったより早くナイダスが出来そうなの。お願いね」

「御意」

…えっと。

「ツァーラの執事さん？」

「そうよ。だから早く乗って、晴子。また後で会いましょう」

「う、うん」

大丈夫だよな変なヤクザとかじゃないよね、何かあったらアデリアさん達助けに来てくれるよね！

と言っかアタシ、クリーチャーに見つからないから大丈夫なんだけど、それでも乗らなきゃダメ？

「ツァーラ、あのさ」

「車は苦手？」

「いえ、お願いします」

反射的に同意しちゃったアタシのバカ！

あああ、優柔不断な自分を殴りてえ！

疾駆

助手席から見る町は、まだまだ充分に平和だった。

藍色の闇の中、セバスチャンが車を向けたのはデパートの駐車場。螺旋を描くスロープを降り、耳障りなファンノイズが反響する駐車場を通り抜け、突き当たりに一つだけある立体駐車場の上へと車を乗せる。

それを合図としたかのように、すう、と台が降下を始めた。ダッシュボードのモニタを見れば小さく無機質な「認証完了」の文字。

右下に一瞬だけ出た数字は、車のナンバーか何かだろう。

「ツアーラって、お嬢様だったんですか？」

「はい。御両親が、名を馳せた方でして」

「どんな？」

「歌姫と、脚本家に御座います」

そんな説明を受ける間にも、車の高度が下がって行く。

やがて天井だった場所が閉まり、暗闇がフロントガラスを埋め尽くした。

唯一の光源である、モニタの光にぼんやりと照らされる運転席と助手席。

それに目を慣らしていると、ぱっと左右の壁が明るくなった。

「うわ」

次々と、通路の奥に向けて点灯して行くトンネルライト。

その光が暗闇を完全に追いやった辺りで、セバスチャンがアクセルを踏んだ。

なめらかに発進した車が、ゆっくりと速度を上げて行く――

「こんな抜け道あるんですね」

「ええ、到着まで数分です。最短のルートを通って行きます事、なにとぞご了承下さいませ」

ゆるいカーブを描きながら続くトンネルに、車を走らせながらセバスチャンが微笑む。

そうやってやっと、アタシは落ち着いてセバスチャンの顔を見る事が出来た。

綺麗になで付けられたオールバックの白髪に、アタシのコンタクトと同じく何か入れてあるであろう銀のモノクル。

紳士的に短く仕立てた髭に、優しい輪郭を描く青目。

服は白いシルクシャツに赤いスカーフ。その上に重ねた黒のベストの胸元に、鋼の薔薇のコサージュが飾られている。

オッサンと言うよりオジサマだ。

穏やかな人なんだろうなあと眺めていたら、彼がふと口を開いた。

「晴子様」

「あ、はいっ」

「少々揺れますので、気をつけて下さいませ」

「はい？」

…ヤな予感。

そう思った次の瞬間には、進行方向で跳ねる無数の影が視界に飛び込んで来た。

「クリーチャー！」

「然様で御座います。ナイダスを通過する方がコースとして近いものでして」

む、無謀過ぎるわそのショートカット！

なんてツツコミを入れたって、アタシが何かできるワケでもない。直後、「参ります」なんてやたら冷静に宣言したセバスチャンがアクセルを踏み込み、ぐん、と車が加速した。

スピードメーターがサクッと振り切れ、最高速度に達した車が群れに突っ込んで行く。

「ひ…っ！」

飲んだ息すら胸に詰まる。

途端に距離を詰めたクリーチャーが、寸前でハンドルを切った車

のギリギリ右方をかすって行った。

やった！と思った次の瞬間には二体目が目前。

それも際どいタイミングで切り抜けたセバスチャンに、思わず内心で拍手するアタシ。

そこから次々と鋭い蛇行で襲撃をかわすセバスチャンの運転に、タイヤが甲高いスکیل音を刻む。

その加速重力に振り回されている内に、アタシの余裕もどこかに消し飛んで行った。

「あ、アデリアさんっ！」

何度目のコーナリングだっただろう。

迫ったクリーチャーを素早いドリフトでセバスチャンが切り抜けた瞬間、アタシはアデリアさんの名を呼んでいた。

発した言葉を自分で聞いて、やべ、と思わず背筋が冷える。

けれど、そのおかげで、セバスチャンの様子を確認するぐらいの余裕ができた。

「……」

フロントガラスを睨んでいるセバスチャンが、アタシの声にまで気を回す余裕はなさそうだ。

それを確認してミラーシェイドを鞆から引き抜き、セバスチャンから顔を背けるようにしてそこに唇をよせる。

「アデリアさんっ！」

そう呼びかけても応答は来ない。

通信切れてる！？と急いでアンテナを確認しても、圏外のシグナルはない。

「アデリアさんっ、ナイダスが来てます！アデリアさんっ！」

あせるアタシが何度呼びかけても戻るのは沈黙。

マジか、何かあったのか。

と、沸き起こる不安に表情を曇らせていると、やっとアタシの異変に気付いたのかセバスチャンが声をかけて来た。

「晴子様？」

「いえ何でも！到着はいつ！？」

「もうすぐ、ナイダスの切れ目です」

そう言ったセバスチャンが少し速度を落とすと、クリーチャーが大きく跳ねて飛びかかって来る。

それが放物線の一番高い場所まで達したタイミングで、再びセバスチャンがアクセルを踏み込んだ。

キツ！と高い音を軋ませた車と、クリーチャーが上下で素早くすれ違う。

それを最後に、前方からもう何も来ていない事を確認した所で、セバスチャンが何かを視線で示した。

そこにあつた丸い物体。

手榴弾にしか見えないそれを手に取って、アタシはセバスチャンの方に顔を向けた。

「これ使えますか？」

「一時結界です。後方に」

投げて下さいと言うセバスチャンの言葉に従ってピンを抜き、窓から後ろに向けてブン投げる。

くそつたれ、怖い思いさせやがってふざけんな！

そんなアタシの心が通じたか否か、二、三度地面を跳ねたそれが大きく光り――

炸裂したその場所に、文字で編まれた壁を構築した。

開眼

REGULUS。

通称獅子棟、機械に関わる無機質な建物。

その一室、コントロールルームに当たる部屋は、非常に物々しい雰囲気だった。

大きな壁を埋め尽くす無数のモニタと、その下方に並んだコンソール。

そして画面にはアタシがさっきまでいた商店街の辺りが、マップと並列で大寫しになっている。

「大丈夫ですか、晴子様」

「…何とか」

車を降りてしばらくの間、膝がふるふるして立てなかったけどね！だから出迎えてくれたのが受付の人だけで本当に良かった。

全員に注目されたら恥ずかしくてたまらん。

「何が始まるんです？」

セバスチャンの肩を借りた事に礼を言い、ゆっくりと自分の足に体重を戻す。

それから改めて画面を見ると、穏やかな声が耳に触れた。

「移送ですな」

ああ、こんなに大規模にやるのか。

コンソール——計器やスイッチに溢れた制御卓。

その台の前にいる老若男女の技師は、多分、誰もがミーディアムなんだろう。

だけどぎつと見た感じ、青色なんて見当たらない。

それが何となく気まずくなって、アタシはこそつとセバスチャンの後ろに半分隠れた。

「アタシ、ここにいていいの？」

「もちろん。どのみち授業でいずれ疑似体験する事になりますから」

「……」

「大丈夫ですよ、理事長様より、晴子様がクリーチャーに対する視覚免疫をお持ちとうかがっておりますので」

「免疫？」

「見ても影響されないう事です。そうした場面を見る訓練をされたのでは？」

「ああ、うん。はい、一応」

実際に訓練なんてした事ないけど、クリーチャーを相手にするゲームなら腐るほど経験がある。

さすがに車の時みたいに目の前まで来るとビビるが、画面で見たり、普段のナイダス破壊みたいに遠くから見ると平気だ。

そんなアタシの耳に、聞こえて来る技師達の応答。

そこでテンポ良く交わされる会話には、場馴れの雰囲気が滲んでいた。

「出力は？」

「正常です」

「増幅器は？」

「問題ありません」

と、そこでモニタが一度数値だけの画面になり、続けて螺旋棟が映し出される。

それを見て、ふと首を傾げたアタシに、波は螺旋棟から出されるのだとセバスチャンが教えてくれた。

す、と螺旋棟を映していた画面が暗くなり、また数値が現れる――途端に、技師達の声が緊張を帯びて来た。

「マーカーを確認、レセプターとの反応テストOK。出力スタンバイ、号令願います！」

「住民への避難命令は？」

「先程済ませました」

「営業開始までの予測は？」

「99%信頼区間で30秒から9分30秒。特に目立った加速もな

いですし、2分までは猶予があるかと」

「地図を」

「はい」

その声でまた画面が切り替わり、ワイヤーマップが映し出される。そこに次々と、住民の存在を示す光点が描き出されたタイミングで、ついに号令が飛んだ。

「開始！」

一声と共に反応が始まり、住民を示す光点が勢い良く消えて行く。刹那に響いたのは、高く、透き通った風の歌だった。

それに気付き、とつさに窓に駆けよったアタシの目に映ったのは、真鍮パーツを天に向けてひねり上げたフォルムの螺旋棟。

その表面に、水面できらめく夕日のような色が、ゆらゆらと幻想的にゆらめいていた。

「……ああ」

どうしよう、泣きそうだ。

見える光景は、ただただ綺麗なだけなのに。

夕暮れの教室とか、一人の自室とか、なぜかそんなものが次々と思い浮かんで消えていく。

例えば大切だった誰かを、どうしても思い出せない時の寂しさとか。

もどかしい、全てから置き去りにされたような感覚とか。

急に自分が小さくなったみたいな、世界中がアタシを放って先に行ってしまったような虚しさとか――

そんな感傷が消えたのは、螺旋棟から光が消えるのとはほぼ同時だった。

「……アホらし」

センチメンタルなんてガラじゃないのに。

何やってんだと自分を笑って、気分を切り替えてセバスチャンの元に戻る。

もうマップに映る光点はほとんど無くなっていて、移送が終わっ

た事を示しているのみ。

後はナイダスだけだな、と思っていると、技師の一人が強く声を上げた。

「――来ます、開眼始まりました！」

今まで見えていなかったものも、このモニタを通せばクリアに見えるのだろう。

アタシが見たのは、商店街上空にナイフで入れたような傷が何十何百と開き、それが目玉と化す光景だった。

ギラギラと地上を見下ろす瞳はどれも鋭く、獲物を狙う獣を思わせる。

「セバスチャン、あれ何!？」

「目です」

見りゃわかるわそんな事!

「いや、そうじゃなくてですね。何であんなに目が現れてんのかと」
驚いたせいで、一瞬、口調が素に戻っちゃったじゃないか。

そんな反省を噛み締めつつ画面を睨んでいると、セバスチャンが説明をくれた。

「あれは、クリーチャー達に位置を伝えるための器官です。人間の目と形は違いますが、視神経に該当する部分もきちんとありましてそれが、ブラインド・スポットになります」

ああ、ツァーラの言ってた彼らの「見落し部分」か。

「じゃあ、あの目玉全部潰せば解決ですよね」

「残念ながら、我々には探知できても干渉は出来ません。出来るのはゲシュペンストだけです」

「ああ……」

って思い出したああっ!

「セバスチャン、ツァーラは!？」

「お嬢様でしたら、ナイダスに残っておられますが」

そう平然と言うセバスチャンを前に、拳動不審になるアタシ。

そうだ、逃げる事に夢中ですっかり忘れてたけど、あそこには」
が。

「せ、セバスチャン、戻って。アタシあそこに行かなきゃならない！」

「大丈夫ですよ、お嬢様はナイダスごときに負けたりはしません」

「違う、違うの。お願い！」

ツァーラの目は本気だったし、」を見つけたら挑みかかるだろう。
」の力を思えば、軽く相手したつもりでツァーラを吹っ飛ばし
かない。

「お願い——友人がいるの！」

「それほど心配されるような？」

「うん！」

今めっちゃ心配してる。してますよ。

——主にツァーラの方を！

特攻

「ごめん、セバスチャン。ありがとう」

再び助手席に腰を落ち着けて、運転席へと感謝を告げる。

「いえ、何か事情があらいたうゆうですから」

と、車を走らせながら、セバスチャンが応じてくれた。

さすが、ツアールの執事だと改めて思う。

…後部座席が武器で一杯。

思い切り素の口調で話してしまった事を後悔したりもしたけれど、セバスチャンが気にしないのでその場の気分で行く事にする。

そして、走行距離を示すメーターにちらりと視線をやつて、ふと沸いた嫌な予感にアタシは眉をひそめた。

…ん？

この先つて、さつきクリーチャーとエンカウントした場所だよね？まさか、と思つていと案の定、セバスチャンがアタシに声をかけて来た。

「晴子様」

「あ、はい」

「そろそろ彼らと対面致しますので、運転を代わつて下さいませ」
何ですと！？

「あ、アタシ運転した事なつ…」

「では撃墜側に？」

「そつちの方が無理っ！」

「では、よろしく願ひします」

そう、さらつと言つて立ち上がるセバスチャン。

そこからルーフウィンドウを空け、天井に上る彼を呆然と眺めてからアタシはハツと我に返つた。

隣には——空のままの運転席。

「わ、あつ。ちよつと、シヤレにならねええっ！」

いくら直線コースでも、慣性の法則で突っ走る車の速度たるや相当のもの。

アタシは慌てて運転席に移動し、車体のブレにふれて小さく動くハンドルを恐々と見つめた。

お、落ち着け。

落ち着けアタシ。

事故つたら死ぬよ、アタシだけじゃなくてセバスチャンも死ぬよ！
この年で人殺しとかカンベンだよ！

その思いを独り言に変えていると、セバスチャンが穏やかに応じてくれた。

「ご安心下さい、命に換えても晴子様はお守りしますので」

そう言つて、後方でマシンガンを構えるセバスチャン。

カシヤン、と銃器固定のための金具が噛み合う音を聞きながら、アタシはくつと唇を噛んだ。

「そう言うのが嫌だつて言つてんの！」

人殺しはカンベンだつて言つたじゃん！

誰かを犠牲にしてまで生きたくないなんてない、甘っちょろいと笑うなら笑え。

そうなるぐらいならアタシは逃げる。

だって、ずっと逃げて来た。

それでも逃げられないなら、その時は――

「どっちも生き残る！生き残つて下さい！そうじゃなきゃ嫌だ！」

そう叫び上げてハンドルに手をかける。

そして震える指でそれを握り締め、アタシはキツと前を睨んだ。

「……なめんなよ」

緊張でガチガチになつて膝に活を入れ、アクセルへと靴底を乗せる。

その途端、屋根の上で準備を終えたセバスチャンが冷静な声を發した。

「ご命令承りました。では晴子様、活路を切り開いて下さいませ」

「……っ！」

前方、大量に視認できるのはさっきと比べ物にならない数のクリチャー！。

確かにこれを避けるのなんて不可能だ。

こうなったら、

「うおおあああっ！」

腹の底から声を上げ、思い切りアクセルを踏み込む。

直後にマシンガンの銃声が炸裂し、群れるクリチャーが次々と吹っ飛んだ。

その密度が薄くなった辺りを狙って、わずかにハンドルを切って突っ込んで行く。

吼え猛る銃の爆音。

重なるクリチャーの断末魔。

後方に流れ飛んで見えるライトの光が、時折、散った血の赤さに

霞む――

それを視界の端に捉えながら、アタシは一路、来た道を逆走して行った。

確認

現地に戻るまでに、それほど時間はいらなかった。

ただ、到着する少し前、前触れもなくクリーチャー達が倒れ――それらを覆うように現れた文様を見て、アタシは不安を倍増させた。

地上に出て、車を降りてみれば案の定。

「こうなる気がしてたんだ！」

高々と天に向けて伸びビルの上に、見える人影は全部で三つ。

二つの方は、Jとライサ。

残る一つは、ツァーラ。

さっきの文様はJのものだ。

となると、マザーは既に撃墜済みって事になる。

「セバスチャン！ちょっとアレ止めさせて！」

っていなくなってるし！

考えたらセバスチャンはツァーラの執事なワケで、さては援軍として向かったのか。

見事に全面对決、一触即発の状況をそこに見て、アタシは急いでミラーシェイドをかけた。

Jの居る辺りへ集音を向けると、会話がノイズ交じりに飛び込んで来る。

ついでにズームをかけると、ライサの無表情が目飛び込んできた。

デープグリーンの瞳。見事にバトルモード全開だ。

ああなったライサは容赦ない。

さあつとアタシの顔から血の気が引いた。

ライサに停止を呼びかけたいけど、さっきからアデリアさんとの通信が繋がらない。

ライサに呼びかける部分の通信権はアデリアさん持ちなだけに、

アタシにはどうにもできなかった。

「……っ」

ぎッ、と悔しさに歯を食い縛る。

見えるのは、屋上に立つツアーラと、そしてJの背後でフェンスに立つライサ。

さらに聞こえたのは、笑み混じりのJの声だった。

『帰還の命令が出てンじゃねえの？レディ。もうお仲間は帰ったぜ』

『…貴方を殺したら、帰ります』

『ナイダス破壊の駒を減らして、悠々と組織に戻るのか？』

『いいえ、お父様とお母様の元に』

ちよつと待てええ！？

息一つ乱さないJに対し、ツアーラの方には疲れが見える。

コレ、のんびり眺めてる場合じゃねえ！とアタシは急いでビルの方へと駆け出した。

「何、やってんだろアタシっ……」

ツアーラに大きな恩はない。

ほっといたって、多分アタシは困らない。

なのに、何でかそれが出来なかった。

時折うつむくツアーラから、孤独の寂しさを感じたからかも知れない。

「ワケ、わかんねえっ……」

何でこんなに必死になっただ。

もう全部あきらめたんじゃないかったのか。

世の中はどうにもならない事だらけだから、遠巻きに眺めて、嫌な事からは逃げてりや済むって自分で決めたんじゃないかったのか——

「クソツタレ」

乱れた息を整えながら、ビルの合間、路地へと飛び込む。

その瞬間、こらえていた言葉がアタシの喉を突いた。

「クソツタレ——エレベーターどこだああ！」

バカと煙と高い所すぎんだろ三人とも！

もつと低い場所で戦えよ！遠いよ！

電力の落ちた高層ビルが、こんなにも不便だとは思わなかった！

「ふざけんな、何のタメにアタシがここに来たと思ってるんだ！」

ゴーストタウンと化した街に向け、力の限り叫ぶ。

ガンッ――

何かを殴るような音が、遠くから聞こえたのはその時だった。

「っ！？」

耳を澄ませば、崩れかけた建物の向こうからそれが聞こえてくる。

ガンガンガンッ……ガンッ！

根源に近付くにつれて音は大きくなり、やがてアタシは『それ』を目撃した。

アタシの身長と同じぐらいのクリーチャー。

それが、閉じられた扉を両手で叩いている。

獲物を狙ってというより、中にいる何かを確認するような様子。

対して、扉の内側から帰って来たのは怯えた人の声だった。

「来るな！」

少年声。

恐らく、避難命令を無視したか聞いてなかった奴なんだろう。

声が出せるって事は生きてる証拠。となると、このまま放っておくのも後味が悪い。

「……ったく」

小声で悪態をつき、そろりと石を持って近づいて行く。

そこからクリーチャーの辺りに石を投げ、アタシはサッと壁に身を隠した。

「グルアアアッ！」

「っっ！」

思わず出そうになった悲鳴を、口に両手を当てて押さえつける。いくら見つかりにくいと言われていても、万が一見つかったらゲームオーバーだ。

鋭い爪も、生え並んだ牙も、一撃でアタシを殺せるレベル。

そう思った途端、恐怖と緊張で一気に心音が跳ね上がった。

落ち着け。

落ち着けアタシ。

「……く、っ」

低く唸るクリーチャーが辺りの様子をうかがう間、落ち着けと自分に言い聞かせて息を詰める。

そうしているうちに、アタシを探すのに飽きたんだろう。

ぶわっと虫のような翅を生やして、そいつがどこかに飛んで行ってしまった。

「……こ」

怖かった……！

へたりと涙目で座り込み、片手でぐしりと目元を拭う。

それから息を整えつつクリーチャーが戻って来ない事を確認し、アタシは扉ごしに声をかけた。

「……いる？」

「ひっ……！」

「いるんだ。えっと……出て来なくていいよ。出て来ると危ないし」

そう声をかけて耳を澄ます。

反応はしばらくなかったけど、少しして、震える声が内側から戻って来た。

「……女の子？」

「一応ね。好きで女に生まれたわけじゃないけど」

「ミーディアム？」

「候補生。そんな奴に助けられるとか、アンタもバカだよね」

「……」

「……とにかく、出て来ないでね。外、危ないから」

そう言い残して場を後にする。

アタシが見つけたんだもの、アタシが助けてやるっての。

「……なんて、本音言ったら顔から火イ吹けるわ。アタシ」

「ならサラッと言えるんだろうけど、アタシには無理だ。」

「……よしっ」

やっと気持ちが落ち着いた。

その平常心を抱えつつ、「J達のいる場所へのルートを考える。

まず近くのビルまで歩いて、そこから昇れば声ぐらい届くはず。

と、目視で推し量った距離をミラーシェイドで再確認し、気合で

非常階段を駆け上がる――

「……は、あつ……」

息が切れる。

膝がガクガクする――

「……も、ムリっ」

残念、体力が持ちませんでした。

ちよつと無謀だったなと思っても後の祭り。

階段の折り返し地点、飾り気のない踊り場で足を止めて、乱れた

息を整える。

そこから地上を見下ろすと、まだ消え切っていないクリーチャー

が見えた。

全体的に弱っているものの、動くだけの力が残っているらしい。

その一体が不意に階段を上がって来たのに気がついて、アタシは

涙目でキツとそいつを睨みつけた。

「アタシじゃなくて、Jのトコに行けよ！」

怒鳴り、踊り場に置いてあるダンボールを引き寄せる。

そしてその角に足を乗せ、アタシは思い切りそれを階段の方へと

押しやった。

「ふんッ！」

一息で箱を蹴り落とす。

途端に階段を転がった中身入りのそれが、クリーチャーを巻き込

んで下の階まで転げ落ちて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6804y/>

ここが願いの終着点

2012年1月14日20時58分発行